

Title	リチャード三世：ヨークの白いばら
Author	横山, 徳爾
Citation	人文研究. 53 卷 5 号, p.5-54.
Issue Date	2001-12
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	横山徳爾名誉教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

リチャード三世 —ヨークの白いばら—

横山 徳爾

ヨーク朝最後の国王であるリチャード三世 (Richard III, 1452-85, 在1483-85) は、在位わずか 2年2か月弱ののちに、1485年8月22日にレスターシャーのボズワース・フィールドにおいて、リッチモンド伯ヘンリー・チューダー (Henry Tudor, Earl of Richmond) に敗れ、32歳にして落命した。リチャードの死によってヨーク朝は滅亡し、28歳のヘンリー・チューダーがヘンリー七世 (Henry VII, 1457-1509, 在1485-1509) として即位し、チューダー朝が成立した。

リチャード三世は、周知のとおり、彼をめぐるいわゆる「チューダー朝伝説」(the Tudor Myth) が存在するために、歴代のイングランド王のなかでももっとも議論のおおい支配者であり、その実像と虚像をめぐる論争は500年間にわたってつづいてきたといえる。現在では、「チューダー朝伝説」が描くリチャード像、すなわち極悪非道な殺人者にして、身体的奇形をともなう怪物というリチャード像は、いちじるしく修正されており、そのまま受け入れられることはないけれども、その実像をとらえることはきわめて困難である。

「チューダー朝伝説」によれば、リチャードは、甥のエドワード五世 (Edward V, 在1483) とその弟ヨーク公リチャード (Richard, Duke of York) (兄エドワード四世の王子たち)、兄クラレンス公ジョージ (George, Duke of Clarence)、みずからの王妃アン・ネヴィル (Anne Neville)、ヘンリー六世 (Henry VI, 在1422-61) とその王子エドワード (Edward of Lancaster)、さらには4人の政敵リヴァーズ伯アントニー・ウッドヴィル (Anthony Woodville, Earl of Rivers)、サー・リチャード・グレイ (Sir Richard Grey)、サー・トマス・ヴォーン (Sir Thomas Vaughan)、ヘイスティングズ卿ウィリアム (William, Lord Hastings) らの殺害者であり、王位篡奪者であり、それにふさわしく身体的特徴も醜い怪物のように描かれてきたのである。ばら戦争の終結によって、ヨーク朝にかわるチューダー朝の登場という歴史的背景のなかで形成されたりチャード三世像は、チューダー朝の論理に左右されたことはいわば当然であった。

リチャード三世は、第3代ヨーク公リチャード (Richard, 3rd Duke of York, 1411-60) の末子 (第12子) であるが、父ヨーク公リチャードは、ケンブリッジ伯リチャード (Richard, Earl of Cambridge) と第4代マーチ (ウェールズ辺境) 伯ロジャー・モーティマー (Roger Mortimer,

4th Earl of March) の娘アン・モーティマー (Anne Mortimer) との子であった。ケンブリッジ伯リチャードは、エドワード三世の第5男である初代ヨーク公エドモンド・オヴ・ラングリーの子であり、またアンはエドワード三世の第3男クラレンス公ライオネルの曾孫であったので、ヨーク公リチャードは父方からも母方からもエドワード三世の血統につながっていた。

ヘンリー七世は、リッチモンド伯エドモンド・チューダー (Edmund Tudor, Earl of Richmond) とマーガレット・ボーフォート (Margaret Beaufort) の子である。エドモンド・チューダーは、ヘンリー五世の寡婦キャサリン・オヴ・ヴァロワ (Katharine of Valois) とウェールズの豪族オーエン・チューダーとの結婚により生まれた。ボーフォート家は、エドワード三世の第3男ジョン・オヴ・ゴント (John of Gaunt) と三度目の公妃キャサリン・スウィンフォード (Catharine Swynford) との子であるサマセット伯ジョン・ボーフォート (John Beaufort, Earl of Somerset) にはじまる家系である。サマセット伯の子がサマセット公ジョン・ボーフォート (John Beaufort) であり、マーガレットはその娘である。したがって、ヘンリー・チューダーは、母方からエドワード三世の血統につながるとはいえ、ランカスター家の傍系にすぎず、彼のイングランド王としての即位は、まずジョン・オヴ・ゴントの子孫であることによるとしても、ボズワースの戦勝による征服に依拠することがおおきかった。なぜならば、ヨーク家支持者の主張によれば、王位継承権が血統に依拠するものであれば、ヨーク家に優先権があり、ヨーク家にはエドワード四世の長女エリザベス・オヴ・ヨークと、エドワード四世の弟クラレンス公ジョージの子ウォリック伯エドワードが王位継承者として健在であり、ヘンリー・チューダーの王位継承権にはかなり無理があったのである。

「チューダー朝伝説」は、当時の年代記作者たちの記録とそれにもとづくチューダー朝の著作家たちの著作によって形成されたものであるが、子細に検討すれば、チューダー朝の著作家たちは、何らかの意味でチューダー家と関係があり、そのために、リチャード三世を極悪非道な支配者として描き出し、彼を倒したヘンリー七世による王位篡奪の正当性を強調し、流布させねばならない事情があったことは否定できないであろう。「チューダー朝伝説」では、主としてリチャードの人格の倫理的側面が問題とされ、さらに身体的な醜悪さが強調された。

17世紀になると、「チューダー朝伝説」の修正論が盛んになり、リチャードの性格の善良な側面と善政が注目され、この傾向は19世紀までつづく。他方、これに対抗して「チューダー朝伝説」擁護論も盛んであり、19世紀末にはリチャード悪人論の立場のジェイムズ・ガードナー (James Gairdner) と伝説修正論の立場のクレメンツ・マーカム (Clements Markham) のあいだで有名な論争が行われた。20世紀になると、1950年代にリチャード称賛論の立場のケンダル (P.M. Kendall) が登場し、伝説修正論が優勢となった。

リチャード悪人論とリチャード称賛論のあいだの長い論争ののちに、ブリストル大学中世史教授チャールズ・ロス (Charles Ross) が1981年に刊行した『リチャード三世』は、リチャード時代の史料の徹底的分析にもとづいて、チューダー朝伝説とその修正論・称賛論を批判的に

検討し、彼自身のリチャード像を提示した点において、リチャード三世研究史上の画期的な著作となり、以後の研究に多大な影響をあたえたといえる。ロスの研究以後のリチャード論は、リチャードの性格論ではなく、彼の行動およびその治世と業績を政治史・社会史の面から考察し、伝説擁護論と修正論の両者の折衷的な立場が、一般的な見解として定着しつつあるといえよう。

以下において、ロスの著作をはじめとする従来の研究を参照しながら、リチャード三世とその時代を描いてみたい。

(1)

リチャード三世は、第3代ヨーク公リチャード・プランタジネットとセシリー・ネヴィル (Cecily Neville) の第5男として、1452年10月2日にノーサンプトンシャーのフォザリングゲイ城 (Fotheringhay Castle) で生まれた。セシリー・ネヴィルは、初代ウェストモランド伯レイフ・ネヴィルと彼の二度目の妻ジョーン・ボーフォート (ランカスター公ジョン・オヴ・ゴントとキャサリン・スウィンフォードの娘) との娘であり、「国王擁立者」(the Kingmaker) ウォリック伯リチャード・ネヴィル (Richard Neville, Earl of Warwick) の叔母にあたる。

ヨーク公リチャードは、前述のとおり、ケンブリッジ伯リチャードの子であり、嫡子なくしてアジャンクールで戦死した伯父の第2代ヨーク公エドワードを1415年に継承して第3代ヨーク公となり、1425年には若死した母方の伯父 (母アン・モーティマーの兄) 第5代マーチ (ウェールズ辺境) 伯エドモンド・モーティマーの相続人と認められて、モーティマー家の莫大な遺産と所領を相続し、マーチ伯、アルスター伯、ケンブリッジ伯として認められた。また1433年にはガーター勲爵士に叙された。その後、1436年から1年間フランスで戦ったのちに、1438年にセシリーと結婚している。彼らのあいだには13人の子が生まれた。

1. 長女ジョーン (Joan) 1438年に生まれ、同年死亡。

2. 次女アン (Anne) 1439年にフォザリングゲイ城で生まれ、①1447年以前に第4代エクセター公ヘンリー・ホランド (Henry Holland, 4th Duke of Exeter) と結婚、②1472/73年にサー・トマス・セント・レジャー (Sir Thomas St Leger) と再婚。

3. 長男ヘンリー (Henry) 1441年にハトフィールド (Hatfield) で生まれ、幼時に死亡。

4. 次男エドワード (Edward) 1442年にフランスのルーアン (Rouen) で生まれる。のちのマーチ伯、エドワード四世。

5. 3男エドモンド (Edmund) 1443年にフランスのルーアンで生まれ、1446年にラトラント伯 (Earl of Rutland) に叙され、1460年12月30日、ウェイクフィールドの戦いで戦死。

6. 3女エリザベス (Elizabeth) 1444年にフランスのルーアンで生まれ、1460/61年に2代サフォーク公ジョン・ド・ラ・ポール (John de la Pole, 2nd Duke of Suffolk) と結婚。1503/4年に死亡。

7. 4女マーガレット (Margaret) 1446年にフォザリンゲイ城で生まれ、1468年にブルゴーニュのシャルル勇胆公 (Charles the Bold, Duke of Burgundy, 1433-77) と結婚。1503年に死亡。
8. 4男ウィリアム (William) 1447年にフォザリンゲイ城で生まれ、幼時に死亡。
9. 5男ジョン (John) 1448年にウェストミンスター (Westminster) で生まれ、幼時に死亡。
10. 6男ジョージ (George) 1449年にアイルランドのダブリン城 (Dublin Castle) で生まれ、1461年にクラレンス公 (Duke of Clarence) に叙される。1478年2月18日にロンドン塔で処刑される。
11. 7男トマス (Thomas) 1450/51年に生まれ、幼時に死亡。
12. 8男リチャード (Richard) のちのグロスター公 (Duke of Gloucester), リチャード三世。
13. 5女アーシュラ (Ursula) 1455年にフォザリンゲイ城で生まれ、幼時に死亡。

これらの子のうち、4人の男子と3人の女子が生き残った。すなわち男子では幼時に死亡したウィリアム、ジョン、トマスを除いて数えれば、次男マーチ (ウェールズ辺境) 伯エドワード (のちのエドワード四世)、3男ラトランド伯エドマンド、4男クラレンス公ジョージ、5男リチャード (のちのグロスター公、リチャード三世) であり、女子ではジョーンとアーシュラを除けば、長女アン、次女エリザベス、3女マーガレットである。

のちのリチャード三世が生まれた1452年には、ヨーク公リチャード・プランタジネットは、イングランド政界においてヨーク派の指導者として、サマセット公エドマンド・ボーフォート (Edmund Beaufort, Duke of Somerset) と激しく対立していた。

(2)

このころ百年戦争はその末期の段階に入っていた。1430年代には数回にわたって和平交渉がこころみられたが、アラスの和平会議 (Congress of Arras, 1435) 以後、ヴァロワ家とブルゴーニュ家の和議がなると、フランスのシャルル七世は軍備を充実させて、1437年にパリを回復した。ブルゴーニュが戦線から離脱したばかりでなく、1435年にはベッドフォード公ジョン・オヴ・ランカスター (John of Lancaster, Duke of Bedford) が死去し、さらにはグロスター公ハンフリー・オヴ・ランカスター (Humphrey of Lancaster, Duke of Gloucester, 1391-1447) を指導者とする主戦派と枢機卿ヘンリー・ボーフォート (Cardinal Henry Beaufort, d. 1447) を中心とする和平派の対立があり、イングランド側はフランスにおいて苦戦を強いられた。1440年代になると、イングランドでは対フランス和平派が台頭し、フランスにおける占領地をできるかぎり維持して戦争を終結させようとした。このころにはサフォーク公ウィリアム・ド・ラ・

ポール (William de la Pole, Duke of Suffolk, 1396-1450) が枢機卿ボーフォートとともに和平派の中心人物になっていた。和平派は、1442年に成年に達した国王ヘンリー六世 (Henry VI, 在 1422-61) とフランス王族の結婚を計画し、1444年にアンジュー公ルネの娘マーガレット (Margaret of Anjou, 1430-82) との婚約が成立した。ヘンリーとマーガレットの結婚式は、翌1445年にウェストミンスター修道院 (Westminster Abbey) においてとり行われた。その後の和平交渉において、フランス側はイングランド占領下にあるメーン (Maine) の引き渡しを要求し、交渉は難航をかさねたが、ついにイングランド側は譲歩してメーン撤退に同意した。ヘンリーとマーガレットの結婚に成功した和平派は、王妃マーガレットとむすんで宮廷においておおきな勢力を形成した。他方、グロスター公を中心とする主戦派は、しだいに国王にたいする影響力をうしなしたが、1447年、ベリー・セント・エドマンズにおいて開かれた議会において、グロスター公は国王暗殺計画の嫌疑をかけられて逮捕され、その5日後に拘留されたまま卒中によって死去した。サフォーク派による暗殺説は根拠がないとされている。和平派にとって最大の政敵は除かれたけれども、和平交渉は和平派の思惑どおりには進行しなかった。イングランド軍のメーン撤退は1448年になってやっと実現したものの、翌1449年になって思いがけない事件が勃発した。休戦協定が交わされていたにもかかわらず、ノルマンディ駐屯のイングランド軍がブルターニュのフージュール (Fougeres) という町を攻撃し、略奪したのである。この事件をきっかけとして、フランス軍はイングランド側を攻撃し、ついには休戦協定が破棄されて、戦闘が全面的に再開された。イングランド側は各地で敗れ、北フランスにおける領土のほとんどをうしなってしまった。

1449年の議会において、和平派の首領サフォーク公は、和平政策の失敗とフランスにおける敗北の責任を厳しく追求され、イングランドの領土をフランスに売り渡したとして弾劾され、ロンドン塔に監禁された。

国王ヘンリーは、サフォーク公を弁護したが、庶民院の攻撃をかわしてサフォーク公を最終的に救う妥協案として、1450年3月に公を5年間の国外追放に処した。サフォーク公は、ドーヴァーからフランスへ向かったが、途中海上で捕らえられ、殺害された。

この間のヨーク公リチャードの動静を見ると、彼は1440年に国王ヘンリーによってフランス総督に任命され、1445年まで在任した。当時のイングランド政界では、グロスター公が1447年に、その6週間後に枢機卿ボーフォートが死去し、つづいて1450年にはサフォーク公が暗殺されたために、ヨーク公リチャードがしだいに脚光をあびる存在になっていた。しかしこの当時イングランド政府を牛耳っていたのはボーフォート一族である。ボーフォート家は、前述のとおり、ランカスター公ジョン・オヴ・ゴントと彼の三番目の公妃キャサリン・スウィンフォードから出たランカスター家の傍系である。ランカスター公の子がサマセット伯ジョン・ボーフォート (John Beaufort, Earl of Somerset, d.1410) とウィンチェスター司教・枢機卿ヘンリー・ボーフォートであり、前者の子が初代サマセット公ジョン・ボーフォート (John Beaufort, 1st

Duke of Somerset, 1403-44) と第2代サマセット公エドモンド・ボーフォート (Edmund Beaufort, 2nd Duke of Somerset, d.1455) である。

ヨーク公は、フランス総督在任中に本国政府から受けた財政面での不当な扱いに立腹していたけれども、もう一度フランス総督の地位を望んでいた。しかし1447年にサマセット公エドモンド・ボーフォートがフランス総督に任命され、ヨーク公自身は議会において公金横領の嫌疑を受けることになった。ヨーク公は身の潔白を証明することができたけれども、アイルランド総督に任命されて、事実上中央政府から遠ざけられてしまった。

1450年5月にケイドの反乱 (Cade's Rebellion) が起こった。これはジャック・ケイドを指導者とするケント州のジェントリーの反乱であり、フランスにおける敗北をもたらした失政の責任を追及し、不公平な徴税に抗議し、ランカスター派が指導するヘンリー六世の政府に腐敗ありとしてこれを糾弾し、財政のたてなおしを要求するものであった。反乱軍は6月18日にはセヴンオークス (Sevenoaks) で国王軍を破り、7月はじめにはロンドン近郊のブラックヒース (Blackheath) に集結したので、ヘンリー六世はケニルワース (Kenilworth) に逃れ、反乱軍は7月4日に首都に入り、民衆からかなりの支持をえて、前ケント州長官で財務府長官のセイ・アン・シール卿ジェイムズ・ファインズ (James Fiennes, Lord Saye and Sele)、現ケント州長官ウィリアム・クロマー (William Cromer) ら数人の貴族を処刑した。この反乱で注目すべき点は、その要求のひとつとして、ヨーク公をはじめとする、のちにヨーク派として知られることになる貴族たちの起用をにかけていたことである。ヨーク公の関与を示す証拠はないけれども、ジャック・ケイドがジョン・モーティマーと名乗り、ヨーク公の遠い血縁者を自称したこともあって、当時はヨーク公がこの反乱を使囂したのではないかと疑われた。数日後、ケイドは、反徒たちを統制できなくなってロンドン市民の支持をうしない、反乱軍を解散したが、彼自身は殺された。

追放同然の身でアイルランドにいたヨーク公は、ランカスター派の政府を批判するこの反乱の報に接すると、政府の許可をえずに4000の軍勢を率いてアイルランドを出発し、8月にウェールズのボーマリス (Beaumaris) に上陸した。政府はこれを武力でもって阻止しようとしたが果たせず、ヨーク公は9月にロンドンに到着してヘンリー六世との会談に成功した。ヨーク公は国王への忠誠心が変わりはないことを述べ、フランスにおける敗退の責任者として、またサフォーク公の後任者としての失政の責任者としてサマセット公エドモンド・ボーフォートを非難し、国政の改革を要求した。ヨーク公は政府における地位を約束されたが、サマセット公との対立はいっそう激しくなったので、国王はサマセット公をカレー守備隊司令官に任命して両派の和解をはかった。ところが、翌1451年5月の議会ではヨーク派が優勢となり、ヨーク公を正式に王位継承候補者と認めることを要求する請願が提出されたので、議会はただちに解散され、請願提出者はロンドン塔に拘禁された。

政情がますます悪化するなかで、ヨーク公はウェールズ辺境のラドロー (Ludlow) 城にこも

っていたが、1452年2月にいたってついに挙兵し、南下してブラックヒースでヘンリー六世の国王軍と対峙したが、ウィンチェスター司教とイーリー司教の仲介によって、サマセット公の査問とヨーク公の告発した諸問題の調査を条件として和解になった。ところがヨーク公は事実上身柄を拘束されてしまい、息子のマーチ伯エドワートが1万1000の兵を率いて攻撃すると威嚇することによって釈放された。こうしてヨーク公の決起は失敗に帰した。しかし1453年の夏にいたってヘンリー六世は精神に異常をきたして統治不能に陥り、また10月には王子が誕生してエドワードと命名された。このような状況のもとに、11月の評議会において、ノーフォーク公ジョン・モーブレイ (John Mowbray, Duke of Norfolk, 1415-61) がサマセット公の失政にたいする査問を要求した。この第3代ノーフォーク公の母キャサリン・ネヴィルは、ヨーク公の妻セシリーの姉にあたるので、ヨーク公とノーフォーク公は叔父と甥の間柄であった。政府はヨーク公の要求を無視することができなくなり、10月にサマセット公はロンドン塔に拘禁された。イングランド北部では、かねて対立していたノーサンバランド伯のパーシー家とソールズベリー伯のネヴィル家が戦争の準備をすすめた。

1454年1月に王妃マーガレットが摂政の地位を要求したが、3月になって評議会はヨーク公を摂政 (Protector) に選んだ。ヨーク公はパーシー家を支持する反ヨーク的なエクセター公ヘンリー・ホランド (Henry Holand, Duke of Exeter) を逮捕して北部の私戦を阻止した。ところが翌1455年2月には、ヘンリー六世が正気をとりもどしたので、王妃マーガレットが実権を握るとともに、3月にはサマセット公とエクセター公が釈放された。ヨーク公は摂政の地位を離れて北部へ去り、ネヴィル一族である義兄ソールズベリー伯リチャード・ネヴィル (Richard Neville, Earl of Salisbury, 1400-60) とその子ウォリック伯リチャード・ネヴィル (Richard Neville, Earl of Warwick, 1428-71)、そして甥のノーフォーク公ジョン・モーブレイらとともに戦争の準備をはじめた。

1455年5月にレスターで評議会が召集されることになったが、ヨーク派は武装しないままレスターにとどまるのは危険であるとして、南下を開始した。他方、国王、王妃、サマセット公らも軍勢を率いてレスターへ向かった。国王にしたがっていたのは、バッキンガム公ハンフリー・スタフォード (Humphrey Stafford, 1402-60)、ノーサンバランド伯ヘンリー・パーシー (Henry Percy, Earl of Northumberland, 1394-1455)、ペンブルック伯ジャスパー・チューダー (Jasper Tudor, Earl of Pembroke, 1431?-95)、オーモンド伯兼ウィルトシャー伯ジェイムズ・バトラー (James Butler, Earl of Ormonde & Earl of Wiltshire, 1420-61)、デヴォン伯トマス・コートニー (Thomas Courtenay, Earl of Devon) らであった。1455年5月22日に国王の一行はハーフォードシャーのセント・オールバンズでヨーク公の軍勢と遭遇した。

百年戦争末期からばら戦争の開始にいたる政情をヨーク公リチャードを中心に概観すれば以上のようになる。このとき、のちのエドワード四世は13歳1か月であり、のちのリチャード三世はまだ2歳7か月であった。

(3)

ヨーク公は戦闘に先立ってみずからの不満を述べ、立場を説明する書簡を国王へ送ったが、この書簡はヘンリー六世まで届かなかった。第一次セント・オールバンズ (St Albans) の戦いは、1時間たらずでヨーク派の勝利に終わり、国王側ではサマセット公、ノーサンバランド伯、バッキンガム公の子スタフォード伯らが戦死し、国王ヘンリー自身も頸部を負傷した。ヨーク公は政権に復帰し、国王の病状悪化にともない1455年11月には摂政に任命された。ウォリック伯はカレー守備隊司令官に任命された。しかし翌1456年2月になるとヘンリーが健康を回復し、ヨーク公は議会においてヘンリーによって摂政を解任されたけれども、評議会にはとどまった。

王妃マーガレットの指導権がしだいに強まり、その後しばらくヨーク公と、王妃マーガレットとサマセット公が対立する状況がつづいた。サマセット公は第2代エドモンド・ボーフォートの子の第3代ヘンリー・ボーフォート (Henry Beaufort, 3rd Duke of Somerset, 1436-64) である。1458年末になると、ヘンリー六世の親政のもとでヨーク派とランカスター派の対立はいちだんと激しくなった。政府の指導権を握っている王妃は、カレー守備隊司令官ウォリック伯を解任しようとしたが、ウォリック伯はスペインやイタリアの船舶にたいする海賊的略奪行為によって国民の人気を博しており、彼を解任することはできなかった。

1459年の春以降、両派は戦闘の準備をはじめた。ソールズベリー伯は北から、ウォリック伯は南からヨーク公がいるラドロー城をめざした。9月23日にソールズベリー軍とランカスター派のオードリー卿 (Lord Audley) の軍勢がブロア・ヒース (Blore Heath) で衝突し、ヨーク派が勝利をえた。その後ソールズベリー伯とウォリック伯はラドローでヨーク公に合流した。国王軍はラドロー城へ向かって前進をつづけ、10月12日に城の近くを流れるティーム川のラドフォード・ブリッジ (Ludford Bridge) で戦闘があり、王妃の率いる国王軍はヨーク派の軍勢を敗走させた。王妃のウェールズにたいする政策が効を奏して、ヨーク派はウェールズから十分な兵力を集めることができず、またウォリック伯が率いるカレー守備隊のおおくが、帰順する者は赦免するという国王の布告におうじて投降したのであった。ラドロー城は略奪され、ヨーク公はウェールズを経てアイルランドへ逃れ、マーチ伯とネヴィル一族はデヴォンシャーを経てカレーへ渡った。急遽11月24日にコヴェントリー (Coventry) で召集された議会は、ヨーク公をはじめとするヨーク派の主要人物たちを弾劾して私権剥奪を宣言し、ヨーク公をアイルランド総督から、ウォリック伯をカレー守備隊司令官から解任した。しかし王妃の令状を携えた使者はダブリンで絞首され、カレーの羊毛専売取引所 (Calais Staple) の羊毛商人たちは、議会の禁止令を無視したのである。サマセット公がサンドウィッチ (Sandwich) 港でカレー攻撃のために艦隊を準備したとき、ウォリック伯は、ブルゴーニュ公と結んで、1460年1月にサンドウィッチを攻撃し、艦船のおおくを捕獲した。王妃の指導する政府は、ヨーク派の侵入を予想して、ヨーク派支持者たちを処刑したり、罷免したが、ヨーク派はこれを政府の圧制の証

拠として利用した。

1460年6月に、マーチ伯、ソールズベリー伯、ウォリック伯がサンドウィッチへ上陸したが、彼らはローマ教皇ピウス二世の特使・枢機卿フランチェスコ・コッピニ（Francesco Coppini）をともなっていた。教皇特使の目的は対トルコ十字軍を募ることであったけれども、特使の同行はヨーク派におおきな威信をあたえた。一行はカンタベリー大司教をはじめKent州の住民に歓迎されながらロンドンへ向かった。ウォリック伯はロンドンを制圧し、ランカスター派の貴族たちがたてこもっているロンドン塔を包囲した。

このころ国王ヘンリー、王妃マーガレット、王太子エドワードはコヴェントリーにいたが、ヨーク派の上陸の報をえると、王妃と王太子は西北へ避難し、国王はノーサンプトンへ向かった。ウォリック伯らヨーク派の軍勢は、ノーサンプトンへ向かって出発したが、カンタベリー大司教トマス・バウチャー（Thomas Bourchier）と、ロンドン、エクセター、リンカン、ソールズベリーの各司教をともなっていた。1460年7月10日、ウォリック軍はノーサンプトン郊外に到着し、同行の司教たちの仲介による交渉が不首尾に終わったのちに、豪雨のなかで戦端が開かれた。ヨーク軍は国王軍を圧倒し、戦闘は半時間で終わった。国王軍では、バッキンガム公、シュローズベリー伯（Earl of Shrewsbury）、ボーモント卿（Lord Beaumont）らが戦死し、王妃はデンビー（Denbigh）へ逃れた。ウォリック伯とマーチ伯は国王ヘンリーに忠誠を誓い、国王をともなってロンドンへ帰った。ロンドンではロンドン塔にたてこもっていたランカスター派は降伏し、ランカスター派のケンダル伯（Earl of Kendal）、デ・ラ・ウェア卿（Lord de la Warr）らがヨーク派に組した。

1460年7月末日にヨーク派によってウェストミンスターに議会が召集され、ヨーク公はアイルランドからチェスターを経て、10月10日にロンドンに到着した。彼は議会で系図を示して王位請求の理由を説明し、エドワード三世の第3男クラレンス公の子孫であるゆえに、第4男のランカスター公の子孫であるヘンリー六世に優先する王位継承権を有することを陳述した。しかし貴族院においてただちに賛同をえることはできず、国王から反論を命じられた貴族たちが裁判所に諮問したところ、裁判官たちはこのような政治問題の司法的解決を拒否した。このような争論ののちに、11月になると、ヘンリー六世の同意をえて、妥協案が提出された。それによれば、ヘンリー六世は終身王位を保持するが、その後王位はヨーク公とその子孫によって継承されることになり、コヴェントリーの議会の私権剥奪は取り消されることになった。王太子エドワードが王位継承から除外されたこのよな解決を、王妃が受け入れるはずはなかった。

王妃と王太子は、ペンブルック伯、エクセター公らとともに北ウェールズにあり、イングランド北部ではランカスター派はノーサンバランド伯を中心として集結し、ヨーク公領を略奪しつつあった。ヨーク公は、これに対処するために、ラトランド伯、ソールズベリー伯らをともなして北部へ向かった。途中、サマセット公の攻撃をうけ、劣勢のヨーク公らはサンダル城（Sandal Castle）へ入らざるをえなかった。1460年12月30日になって、近くのポンテフラクト

城 (Pontefract Castle) に集結していたランカスター軍は、ヨーク軍が劣勢であることを知ると、ウェイクフィールドの野でヨーク派に決戦を挑んだ。ヨーク軍は援軍を待たずに出撃して敗れ、ヨーク公とその子ラトランド伯は戦死し、ヨーク公の首ははねられ、紙の冠をかぶせられてヨーク市の市門に曝された。ソールズベリー伯は処刑された。

ウェイクフィールドの戦いののちに、教皇特使・枢機卿コッペーニは和平のために仲介をこころみたが、王妃マーガレットは仲介の結果を恐れて、これに応じず、スコットランドに援助をもとめた。スコットランドでは、ふたりの摂政のうちブルゴーニュ出身の王太后メアリー・オヴ・ゲルダース (Mary of Guelders) は親ヨーク派であったが、もうひとりの摂政セント・アンドルーズ司教ジェイムズ・ケネディ (James Kennedy) は新フランス派であった。しかし王妃マーガレットは、1461年1月にスコットランドの宮廷において、スコットランド王ジェイムズ三世 (James III, 在1460-88) の妹メアリーと王太子エドワードの結婚およびベリック (Berwick) の割譲を条件に、スコットランドとランカスター派の同盟を確保することができた。

王妃は、この同盟を結んだのちに、ヨークからロンドンへ向かった。ランカスター派のペンブルック伯とオーモンド伯 (ウィルトシャー伯) は西方から王妃に合流しようとしていたが、マーチ伯エドワードは、1461年2月2日 (または3日)、ウェールズとの境界に近いモーティマーズ・クロス (Mortimer's Cross) において彼らを破った。この戦いで、ペンブルック伯の父オーエン・チューダー (Owen Tudor) は捕らえられて斬首された。その長子リッチモンド伯エドマンド・チューダーの子がヘンリー・チューダーである。その後マーチ伯はロンドンをめざして南下した。他方、王妃マーガレットも、サマセット公、エクセター公らとともに南下した。これにたいし、ロンドンで兵を集めたウォリック伯は、国王をともなって北進し、セント・オールバンズにおいてランカスター軍を待ち受けた。1461年2月16日、ランカスター軍はウォリック軍の裏をかいて、これを壊滅させた。この勝利によって王妃はヘンリー六世を奪回したが、ランカスター軍の北部兵たちは市を略奪した。

ロンドン市は、ランカスター軍のこのような略奪行為を知って、入市を拒否し、その後の交渉に手間どるうちに、マーチ伯が、戦場から逃走していたウォリック伯と接触して、2月27日、西側からロンドンに入った。王妃は、これを知ると、ヘンリー六世をともなって、ヨークへ撤退した。ウォリック伯は、マーチ伯を国王に推戴することができると判断した。

(4)

1461年3月1日の日曜日に、ウォリック伯の弟であり、尚書部長官に就任したエクセター司教ジョージ・ネヴィル (George Neville, 1432?-76) が、ロンドンのセント・ジョージズ・フィールズに集まったおよそ3000ないし4000の群衆に向かって演説し、ヨーク公の子であるマーチ伯エドワードが正当な王位継承権を有することを説明した。この演説は、エドワードのロンド

ン入市後に民衆の心を効果的につかむための、慎重に考え出された演出のひとつであった。民衆はこの演説に歓呼をもって応え、国王エドワードを歓迎する意思を表明した。そして民衆の代表者たちは、この知らせを伝えるために、テムズ河畔にあるヨーク家のロンドン邸宅であるベイナード城 (Baynard's Castle) へ駆けつけた。翌日には、マーチ伯エドワードの王位継承権の正当性がロンドン中で公式に布告された。3月3日に急遽ベイナード城に召集された評議会において、エドワードの国王推戴が決定された。出席者は、カンタベリー大司教トマス・パウチャー、ソールズベリー司教リチャード・ビーチャム (Richard Beauchamp, Bishop of Salisbury), エクセター司教ジョージ・ネヴィル, 第3代ノーフォーク公ジョン・モーブレイ, ウォリック伯, サー・ウィリアム・ハーバート (Sir William Herbert, d.1469), サー・ウォルター・デヴァルー (Sir Walter Devereaux), そして「その他おおぜい」(multi alii) であった。3月4日の水曜日にエドワードはセント・ポール大聖堂でのミサに出席したのちに、ウエストミンスター宮殿へおもむき、グレート・ホールで即位の宣誓を行ない、王位継承権の正当性をみずから説明し、群衆は歓呼をもって応えた。

こうしてエドワード四世が即位し、ランカスター朝にかわってヨーク朝がはじまった。エドワードは、北部においてヘンリー六世と王妃マーガレットが率いるランカスター派と対決するために、3月19日にロンドンを出発した。両派の決戦は、3月29日にタドカスター近くのタウトン (Towton) において、激しい吹雪が降りしきるヨークシャー特有の悪天候のなかで行なわれ、ばら戦争をつうじて最大の激戦となった。数時間にわたって激闘がつづいたが、午後になってノーフォーク公からの分遣隊が到着すると、戦況はヨーク軍が優勢となった。ランカスター派ではノーサンバランド伯ら数名の貴族が戦死した。デヴォン伯は捕らえられて、翌日ヨークで処刑された。オーモンド伯もその後まもなくニューカースル＝アポシ＝タインで処刑された。42名の騎士が捕虜となって処刑されたと伝えられる。ヘンリー六世、王妃マーガレット、王太子エドワードは、サマセット公、エクセター公らとともにスコットランドに亡命した。タウトンの戦いはエドワードにとって大勝利であった。特に、従来ランカスター派であったパーシー家、クリフォード家、ロース家、デイカー家などの北部の大貴族が勢力を失墜したことが重要である。これによってヨークシャーからスコットランド国境にいたる地域が王権の支配下に入るようになった。

1461年6月26日にエドワード四世はロンドンに入り、28日に戴冠式が挙行された。11月の議会はエドワード四世の即位が正当な王位継承権にもとづくことを認めた。このときエドワードは19歳であり、リチャードはまだ8歳にすぎなかった。ヨーク公リチャードの子供たちのうち、次男エドワードと3男エドマンドはウェールズ辺境地域にあるヨーク家の居城ラドロー城で育てられ、4男ジョージと5男リチャードはノーサンプトンシャーのフォザリングゲイ城で、その後はロンドンのベイナード城で直接母セシリーの手によって育てられた。リチャードが最初にばら戦争の渦中に巻き込まれたのは、1459年10月12日のラドフォード・ブリッジの戦いのとき

であった。ヨーク軍は王妃マーガレットの国王軍に敗れ、近くのラドロー城は略奪されて、ジョージとリチャードは母ヨーク公妃とともに国王軍の手に落ちた。ヨーク公妃は、姉のバッキンガム公妃アン・ネヴィルの保護のもとにおかれた。その後数か月間、ヨーク公妃、ジョージ、リチャードがどこにいたかは不明であるが、バッキンガム公はヘンリー六世の熱心な支持者であったけれども、ヨーク公妃はバッキンガムの義理の妹として丁重に扱われたものと思われる。

その後、1460年6月にソールズベリー伯、ウォリック伯、マーチ伯らのヨーク派がカレーからイングランド侵入に成功し、7月10日のノーサンプトンの戦いで、ヘンリー六世を捕らえた。バッキンガム公は戦死した。この後、ヨーク公妃、ジョージ、リチャードはヨーク公家のロンドン邸宅であるベイナード城に居を定めたものと思われる。

しかしヨーク派は、前述のとおり、1460年12月30日のウェイクフィールドの戦いで王妃マーガレットの率いるランカスター軍に敗れ、父ヨーク公と兄ラトランド伯が戦死し、さらに翌1461年2月17日の第2次セント・オールバンズの戦いでウォリック伯が敗れ、ランカスター軍はロンドンの北西の市門クリップルゲイトに到達したのである。

このような状況において、ヨーク公妃はジョージとリチャードを海外へ亡命させることを決意し、彼らをブルゴーニュ公国のフィリップ善良公 (Philip the Good, Duke of Burgundy) に託することにした (1461年2月)。4月17日、彼らはスロイス (Sluys) で公の使者に迎えられ、ブルージュ (Bruges) の公の居館へ案内された。ところが、イングランドにおける政情はふたたび激変していた。2月2日 (または3日) のモーティマーズ・クロスの戦いでリチャードの兄マーチ伯がランカスター軍を破り、南下してロンドンに入ると、3月4日にはエドワード四世として国王に推戴されたからである。さらに、エドワードは3月29日のタウトンの戦いにおいて、ランカスター軍の主力を壊滅させることに成功した。エドワードは、いまやジョージとリチャードを呼び返しても安全であると考え、彼らはカレーを経由して6月12日ころにイングランドに帰国し、6月28日の戴冠式ではそれぞれの役割をはたすことになる。

1461年6月26日、ジョージとリチャードはバス勲爵士 (Knight of the Bath) に列せられ、つづいて6月28日にはジョージはクラレンス公 (Duke of Clarence) に叙され、ガーター勲爵士 (Knight of the Garter) に列せられた。リチャードは、少し遅れて11月1日にグロスター公 (Duke of Gloucester) に叙された。その後、クラレンス公とグロスター公は、王室府の養育係の監督のもとにグリニッジ宮殿で暮らしたと思われる。グロスター公の教育については何も分かっていない。しかしクラレンス公とグロスター公が、一時はカンタベリー大司教トマス・バウチャーのもとに預けられた証拠がある。

1464年になってエドワード四世の結婚問題が具体化してきた。かなり以前からブルゴーニュとの縁組みが考慮されていたが、このときにはウォリック伯の努力によって、フランス王ルイ十一世の義理の妹にあたる、サヴォワ公の娘ボナが有力な候補者とされ、フランス王もブルゴーニュやブルターニュとの関係から、この縁組みに熱意を示した。ところがウォリック伯がこ

の結婚の交渉に当たっているあいだに、エドワードは1464年5月1日にエリザベス・ウッドヴィル (Elizabeth Woodville, 1437?-92) とひそかに結婚してしまった。エリザベスは、リヴァーズ卿リチャード・ウッドヴィル (Richard Woodville, Lord Rivers, d.1469) の娘であり、フェラーズ卿ジョン・グレイ (John Grey, Lord Ferrers) と結婚したが、夫を第2次セント・オールバンズの戦いで亡くして寡婦となっていた。ウッドヴィル家またはウイドヴィル (Wydeville) 家はノーサンプトンシャーのジェントリーであって、エリザベスの祖父リチャード・ウッドヴィルはカレー副総督、ベッドフォード公ジョン・オヴ・ランカスター (ヘンリー四世の第3男) の侍従長をつとめた。その子リチャード・ウッドヴィル (エリザベスの父) は、サン・ポール伯ルイの妹でベッドフォード公の寡婦であったジャケッタ・オヴ・ラクセンバーク (Jacquetta of Luxemburg) と結婚し、そのあいだに生まれた12人 (5男7女) のひとりがエリザベスであった。リチャードはその後しだいに昇進し、1461年のタウトンの戦いではランカスター派としてヘンリー六世の側で戦ったが、その後エドワード四世に仕え、エドワードは3年後にその娘と結婚することになった。エドワードが北部の反乱を鎮定するためにノーサンプトンの近くを通過したとき、エリザベスは、戦死した夫ジョン・グレイの没収された土地の返還をみずから陳情したのであった。

ウォリック伯がエドワードの結婚を知ったのは、7月になってからであった。ウォリック伯はみずからの努力が水泡に帰したばかりでなく、この結婚はあまりにも身分違いであったために憤慨した。国王の結婚についてまったくなんの相談も受けなかった貴族たちのなかにも、不快の念を抱く者がおおかった。さらに、エリザベスが王妃の座についてまもなく、ウッドヴィル家の子女たちは、まれにみる有利な縁組みに恵まれることになり、ウッドヴィル家の台頭をもたらすことになる。まず1464年10月には王妃のすぐ下の妹マーガレットがアランデル伯の子で相続人のマルトラヴァーズ卿トマス (Thomas, Lord Maltravers) と婚約した。彼はウォリック伯の甥にあたる。翌1465年1月には、王妃の弟で年齢20歳くらいのジョン・ウッドヴィルが、当時少なくとも65歳であった裕福なノーフォーク公未亡人キャサリン・ネヴィル (Catherine Neville) と結婚して、世間に驚きと不快感をあたえ、当時の年代記作者もこれを「悪魔の結婚」と呼んだ。キャサリンは、アン・ネヴィルやセシリー・ネヴィルの姉であり、エドワード四世には伯母にあたる。

1466年2月11日には、エドワード四世と王妃エリザベスの長女エリザベス・オヴ・ヨークが誕生したが、その後もウッドヴィル家の幸運な婚約や結婚はつづいた。キャサリン・ウッドヴィルは初代バッキンガム公の孫で相続人のヘンリー・スタフォード (Henry Stafford) と結婚した。のちの第2代バッキンガム公である。アン・ネヴィルはエセックス伯の長子で相続人のパウチャー子爵ウィリアム (William, Viscount Bourchier) と結婚した。エレナー・ウッドヴィルはケント伯の子で相続人のアントニー・グレイ (Anthony Grey) と結婚した。ついで1466年9月にはメアリー・ウッドヴィルがハーバート卿ウィリアムの子ウィリアム・ハーバート

(William Herbert) と婚約し、ウィリアムはダンスター卿 (Lord Dunster) の称号をゆるされた。のちの第2代ペンブルック伯である。1466年10月に、王妃は前夫ジョン・グレイとの長男トマス・グレイ (Thomas Grey) をエドワード四世の姉であるエクセター公妃アンの娘で女子相続人のアン・ホランド (Anne Holland) と結婚させるために、エクセター公妃に4000マークを支払った。アン・ホランドはすでに、ウォリック伯の甥で、ノーサンバランド伯ジョン・ネヴィルの子で相続人のジョージ・ネヴィル (George Neville) と婚約していたからである。トマス・グレイはのちのドーセット侯 (Marquess of Dorset) である。

ウォリック伯は、ウッドヴィル家のこれらの縁組みに不快の念を抱いた。ホランド家との結婚はネヴィル家への公然たる侮辱とみなされ、叔母のノーフォーク公妃はウッドヴィル家にうまく利用されたように思われ、バッキンガム公家との縁組みも腹立たしいものであった。ダンスター卿の称号については、ウォリック伯はこれをみずから望んでいたのである。またウォリック伯には、まもなく結婚させなければならないふたりの娘がいた。1451年9月5日生まれの長女イザベル (Isabel) と1456年6月11日生まれの次女アン (Anne) である。ウォリック伯はイザベルとバッキンガム公家のヘンリー・スタフォードの結婚を考えていたかもしれない。イングランドでもっとも裕福な女子相続人たちであるイザベルとアンにふさわしい配偶者は、いまやエドワード四世の弟であるクラレンス公とグロスター公しか残っていなかった。

グロスター公リチャードは、1465年からウォリック伯の保護のもとにおかれ、おそらくのウォリック伯の北部の所領にあるミドラム (Middleham) 城やシェリフ・ハットン (Sheriff Hutton) 城で過ごしたと考えられる。リチャードはこのころに将来の妻アンや、当時ウォリック伯の被後見人でのちにリチャードの忠実な支持者となるラヴェル卿フランシス (Francis, Lord Lovell) と知り合ったのであろう。リチャードは後年北部におけるウォリック伯の政治的地盤を継承することになるが、1465年から1468年にかけてリチャードが北部における貴族・ジェントリー層、すなわちスクループ家 (Scropes)、フィッツフューズ家 (FitzHughes)、グレイストークス家 (Greystokes)、デイカー家 (Dacres) に属する人びとと知り合ったことは、重要な意味をもつことになる。

エドワード四世の宮廷では、ウッドヴィル家の台頭によって、1466年にリヴァーズ伯 (Earl Rivers) に叙された、王妃の父リチャード・ウッドヴィル、第2代バッキンガム公ヘンリー・スタフォードを中心として新たな宮廷派が形成された。エドワードは、ウッドヴィル一族のさまざまな縁組みを認めることによって、強大なネヴィル一族の権力を制限し、さらには旧ランカスター派との和解を意図したのかもしれない。いずれにせよ、フランスの王族を王妃に迎え、フランスとの同盟政策を推進するというウォリック伯の計画が挫折したことはたしかであった。さらに、1466年になって、エドワード四世の妹マーガレットとブルゴーニュのフィリップ善良公の子シャルル、つまりのちのシャルル勇胆公との結婚問題が起こり、ウォリック伯は親フランス政策の立場から反対したが、羊毛輸出にもとづく、伝統的なイングランドの親ブルゴーニ

エ政策が優先され、この結婚をきっかけに1468年にはブルゴーニュとの通商条約が締結されるにいたった。

こうして宮廷においては、エドワード四世とウォリック伯の対立がしだいに顕著になってきたが、1467年6月にエドワードは12名の貴族（このうち10名はウッドヴィル一族につながる貴族）をともなってヨーク大司教ジョージ・ネヴィルをその邸宅に訪れ、彼を尚書部長官の地位から解任した。ジョージ・ネヴィルはウォリック伯の弟であり、エクセター司教であった1460年に尚書部長官に任命されていた。その後1465年にはヨーク大司教に任命されて、イングランド政界の中核において活躍していた。ブルゴーニュとの通商条約は彼の功績であり、フランスの中立を確保し、スコットランドとは和平を結んでいた。解任の理由として、ジョージ・ネヴィルは、エドワードの反対にもかかわらず、ウォリック伯の長女イザベルとクラレンス公の結婚を画策していたとされた。

いまやエドワード四世とウォリック伯の関係はきわめて険悪となったが、ウォリック伯は、1468年にカレー守備隊司令官となり、翌1469年7月11日にクラレンス公とイザベルの結婚式がカレーにおいてヨーク大司教によってとり行われると、ウォリック伯らは翌12日にカレーから公開書簡のかたちで宣言を出して、国王が血縁者である大貴族を政治から遠ざけていることに抗議し、リヴァーズ伯とその夫人エリザベス・スケイルズ (Elizabeth Scales)、サー・ジョン・ウッドヴィル (Sir John Woodville) とその弟たち、ペンブルック伯 (Earl of Pembroke) とデヴォン伯 (Earl of Devon)、オードリー卿 (Lord Audley) とサー・ジョン・フォッグ (Sir John Fogge) らを名指しで非難した。こうしてウォリック伯の反乱がはじまった。

反徒たちはケント州に上陸すると歓迎され、7月18日にカンタベリーを出発してロンドンへ向かった。ちょうどこのころに、北部のヨークシャーではロビン・オヴ・リーズデイル (Robin of Redesdale) の指揮する、エドワード四世にたいする反乱が起こっていた。これはウォリック伯とクラレンス公の教唆による反乱であり、ロビンとは、サー・ウィリアム・コニャーズ (Sir William Conyers) またはその兄弟サー・ジョン・コニャーズ (Sir John Conyers) の偽名であった。ウォリック伯らは、この北部の反乱と合流するためにコヴェントリーをめざした。

(5)

エドワード四世は、北部からノッティンガムへ入ったが、そこでなんの動きをみせなかった。北部から南下する反乱軍にたいしては、ペンブルック伯ウィリアム・ハーバート (William Herbert, Earl of Pembroke) がウェールズの兵を率い、デヴォン伯ハンフリー・スタフォード (Humphrey Stafford, Earl of Devon) が西部からの兵を率いて阻止しようとしていた。7月25日と26日にバンベリー (Bambury) 近くのエッジコート (Edgecote) において戦いが交えられた。反乱軍がペンブルック伯のウェールズ兵を急襲したが、弓兵は大部分が数マイル離れたデヴォ

ン伯の指揮下にあったので、ウェールズ兵は苦戦を強いられたが善戦し、国王軍の勝利に終わるかに思われたとき、ウォリック伯の支持者のひとりであるジョン・クラパム (John Clapham) の小部隊が戦線に加わり、国王軍はこれをウォリック軍の前衛部隊と勘違いしたために士気をうしない、結局反乱軍が勝利をえた。デヴォン伯指揮下の部隊は戦場に現われるのが遅すぎたか、あるいは戦闘に参加しなかった。デヴォン伯は逃走したが、ペンブルック伯とその弟サー・リチャードは捕らえられ、翌日ノーサンプトンでウォリック伯の命令によって斬首された。

エドワード四世自身は7月29日にノッティンガムから南下してノーサンプトンへ向かったが、彼はこのとき国王軍の敗北を知らなかったらしい。ノーサンプトン近くでふたりの伯の運命が知れわたると、ほとんどの部下たちはエドワードを見捨てて逃走し、エドワードはロンドンへの道路沿いのオールニー (Olney) でヨーク大司教に捕らえられ、ウォリック城へ送られた。ウォリック伯は、国王の名において、9月にヨークで議会を召集した。しかしいまやイングランド全土で無政府状態が現出し、特にダラム (Durham) ではランカスター派が蜂起したために、議会の召集は中止されねばならなかった。エドワードはウォリック派に政策の変更を約束したので、混乱を收拾するために一時ミドラム城から釈放された。こうしてウォリック伯は兵を集めることができ、9月末にはランカスター派の蜂起は鎮圧された。

エドワードは釈放されたままポンテフラクト (Pontefract) へ行くと、そこへ弟のグロスター公、バッキンガム公、ノーサンバランド伯、エセックス伯、アランデル伯、ヘイスティングズ卿、マウントジョイ卿ら呼び集めると、ロンドンへ帰ってしまった。ただ大司教ネヴィルが彼らを監視するために後を追っただけであった。ウォリック伯は、評議会へ招請されると、身の安全の保障を要求したうえで、12月にクラレンス公とともにロンドンに現われた。

エドワードは急速に権力を回復しつつあった。彼はウォリック伯とクラレンス公を歓迎し、自分の長女エリザベスを、ウォリック伯の弟ノーサンバランド伯ジョン・ネヴィルの子ジョージと婚約させるなど、和解のための措置を講じた。出し抜かれたウォリック伯は、地方における反乱の勃発を工作し、1470年3月にはリンカンシャーでロバート・ウェルズ (Robert Welles) の率いる反乱が起こった。しかしウェルズは捕らえられて、尋問された結果、ウォリック伯がエドワードを廃位して、クラレンス公を即位させようとしている陰謀が発覚した。ウォリック伯とクラレンス公は、大逆罪で告発され、これに答えるように召喚されたけれども、応じなかったので、エドワードは軍勢を率いてヨークへ行き、その後敵を追って南下した。ウォリック伯とクラレンス公は、マンチェスターとウォリックを経由してエクセターに達し、フランスへ渡った。彼らはウェンロック卿ジョン (John, Lord Wenlock) によってカレーへの入市を拒否されたが、ブルゴーニュとブルターニュの商船を捕獲して、1470年5月にオンフルールに上陸した。

フランスのルイ十一世は、宿敵ブルゴーニュ公を打倒するために、フランスの援助によってウォリック伯とマーガレット・オヴ・アンジューを和解させ、イングランドでランカスター家

を復位させることによって、エドワード四世を倒すとともにイングランドを対ブルゴーニュ同盟にとり込むことができるという計画をかねて抱いていた。そこで1470年6月22日にアンジェーにおいてルイ、マーガレット、ウォリック伯の会談が実現し、マーガレットの息子である王太子エドワードと、ウォリック伯の次女アンの婚約がとり決められた。当時エドワードは16歳、アンは14歳であった。ふたりは7月29日にアンジェー大聖堂において正式に婚約したが、ランカスター公ジョン・オヴ・ゴントが共通の曾祖父であったので、四親等の結婚のための特免をえなければならず、結婚したのはおそらく12月13日であったと考えられている。この協定によってクラレンス公の王位への野望は潰えた。

エドワード四世と同盟関係にあるブルゴーニュ公は、ウォリック伯がイングランド侵入の基地としているセヌ河沖をブルゴーニュ艦隊によって封鎖し、エドワードに情報を伝達していた。ルイはブルゴーニュ公と休戦協定を結んでおり、ブルゴーニュ艦隊を攻撃することはできなかったために、ウォリック軍の出港は遅延した。しかし9月になってブルゴーニュ艦隊が大嵐のために撤退を余儀なくされたとき機会が訪れ、ウォリック伯とクラレンス公は、9月9日にオクスフォード伯ジョン・ド・ヴィア、ペンブルック伯ジャスパー・チューダーらとともに、ラ・オグを出発し、13日にダートマスまたはプリマスに上陸した。このときエドワード四世はヨークにいた。エドワードにとって不運であったのは、前年にウォリック伯の弟ジョン・ネヴィルが兄の陰謀に内通していたとして、彼からノーサンバランド伯の称号と所領を奪い、それらをふたたびサー・ヘンリー・パーシーにあたえ、彼を第4代ノーサンバランド伯に叙していたことである。このヘンリー・パーシーは、1461年にタウトンの戦いで戦死した第3代ノーサンバランド伯の一人息子であった。ジョン・ネヴィルは代わりにモンタギュー侯に叙されていたが、これは実質をとまなわない爵位であったので、彼はエドワードに恨みを抱くことになった。

ウォリック伯はイングランドに上陸すると、真のイングランド王はヘンリー六世であると宣言し、コヴェントリーへ向かって進軍した。ここでモンタギュー侯が兄のウォリック伯支持にまわり、エドワード四世を攻撃する構えをみせた。エドワードの側にはまだおおぜいの忠実な貴族がいたけれども、彼はもっとも安全な道は逃亡であると判断し、リンカンシャーを通過してキングズ・リンからブルゴーニュ公領のフランドルへ渡り、10月11日にブルゴーニュ公のホルランド州総督の邸宅に到着した。同行したのは、グロスター公リチャード、第2代リヴァーズ伯アントニー・ウッドヴィルらであった。このリヴァーズ伯は前年にウォリック伯に処刑された初代リチャード・ウッドヴィルの子であり、王妃エリザベスの兄である。ウォリック軍の上陸からわずか3週間でエドワードの支配が崩壊した理由については、まずモンタギュー侯の離脱がおおきく影響したが、ウォリック伯がかなりの民心をあつめていることをエドワードが認識していなかったことも無視できない。

1470年10月6日にヘンリー六世はロンドン塔から解放され、13日には復位（Redeption）が

宣言された。ウォリック伯はカレー守備隊司令官、尚書部長官、海軍長官などの地位につき、他の要職もウォリック派とランカスター派で占められた。穏健なヨーク派貴族たちは懐柔された。カンタベリー大司教トマス・バウチャー、ノーフォーク公ジョン・モーブレイ、エセックス伯ヘンリー・バウチャー、ウィルトシャー伯ジョン・スタフォード、クロムウェル卿ハンフリー・バウチャー、マウントジョイ卿ウォルター・ブラントラ著名なヨーク派の人びとは逮捕されたが、まもなく釈放された。ただひとりヨーク派として要職を歴任したウスター伯ジョン・ティプトフト (John Tiptoft, Earl of Worcester, 1427-70) がタワー・ヒルで処刑された。彼は、アイルランド副総督や軍察長官時代におおくの人びとを残酷な方法で処刑したために、のちに「イングランドの虐殺者」(Butcher of England) と呼ばれることになるが、他方ではフィレンツェに学んだ人文主義の保護者・学者であり、キケロの『友情論』その他の英訳者でもあった。

11月に開かれた議会において、エドワード四世は篡奪者とされ、ヨーク派による私権剥奪はくつがえされた。12月になるとルイ十一世はシャルル勇胆公との休戦協定の破棄を通告してソナムで兵を動かし、ブルゴーニュ侵入を開始した。翌1471年1月にはルイからの使者がロンドンに到着して、ブルゴーニュへの遠征といふかねての約定の履行を迫ったので、ウォリック伯は参戦せざるをえなくなった。しかしイングランドではだれも対ブルゴーニュ戦争を望んでおらず、またウォリック伯は軍資金を欠いたために、カレー守備隊司令官としての地位を利用できるだけであったが、これはカレーの羊毛商人たちの怒りを買うことになった。

他方、ブルゴーニュ公はかねて援助をもとめていたエドワードのイングランド侵入を認めることになった。エドワードは、3月11日に、グロスター公とともに約1200名の兵と36隻の艦船を率いてオランダのフリシンゲン (Flushing) を出発し、イースト・アングリアのクローマー (Cromer) で偵察隊を放ったのちに、3月14日にレイヴンスパー (Ravenspur) に上陸した。72年前にランカスター公ヘンリー・オヴ・ボリンブルックが上陸した地点である。18日にはヨークが市門を開いた。エドワードは、モンタギュー侯ジョン・ネヴィルがいたポンテフラクト城を避けてウェイクフィールドから南下したが、シュローズベリー伯ジョン・トールボット、スタンリー卿トマス、ジャスパー・チューダーらランカスター派の貴族はウォリック伯を嫌って兵を動かさず、サマセット公エドモンド・ボーフォートとデヴォン伯ジョン・コートニーは、王妃マーガレットと王太子エドワードの帰国を待つという口実でロンドンへ向かった。またニューアークではエクセター公、ボーモント子爵、オクスフォード伯の部隊はヨーク軍と戦わなかった。エドワードは、ノッティンガム、レスターを経て、コヴェントリーのウォリック軍とは戦わずに、4月2日にウォリック城を占領した。ここでエドワードは、かねて接触していたクラレンス公が鞍替えして味方になったことを知った。エドワードは4月11日にロンドンに到着し、ヘンリー六世を捕らえ、みずから王位についた。翌日、南下してきたウォリック伯、モンタギュー侯、エクセター公、オクスフォード伯、ボーモント子爵らの軍勢を迎え撃つために、エドワードは、ヘンリー六世をともなってロンドンを発ち、バーネット (Barnet) へ向かった。

グロスター公の他に、クラレンス公、リヴァーズ伯、ヘイスティングズ卿らがしたがっていた。4月14日の復活祭日曜日に、ヨーク軍とウォリック軍は濃霧のなかで激突し、3時間あまりののちにヨーク軍の勝利に終わった。18歳6か月のグロスター公はこのはじめての戦闘で右翼を指揮した。ウォリック伯とその弟モンタギュー侯は戦死し、彼らの遺体はロンドンのセント・ポール大聖堂内に曝され、人びとに彼らの死を知らしめた。ウォリック派では、オクスフォード伯ジョン・ド・ヴィアはフランスに逃亡し、後年リッチモンド伯にしたがってイングランドに侵入することになる。エクセター公ヘンリー・ホランドは重傷を負ったまま戦場に残されたが、回復し、その後の4年間をロンドン塔に幽閉された。

バーネットの戦いとおなじ4月14日に、イングランドの政情を窺っていた王妃マーガレットと王太子エドワードがドーセットシャーのウェイマス (Weymouth) に上陸した。同行していたウォリック伯夫人アン・ビーチャム (Anne Beauchamp, Countess of Warwick) は、夫の戦死を聞くとビューリー修道院 (Beaulieu Abbey) の聖域に入った。4月15日にサマセット公エドモンド・ボーフォートとデヴォン伯ジョン・コートニーが一行に加わり、バーネットの敗戦にもかかわらず、ランカスター派の大義はうしなわれていないことを王妃マーガレットに説いた。ランカスター軍は西南部で兵を募りながら、エクセター、ブリストル (Bristol) を経由して、ジャスパー・チューダーと合流するためにランカスター派の支配するウェールズをめざした。エドワード四世は4月16日にロンドンで彼らの帰国を知ると、24日にウィンザーを出発し、チュクスベリー (Tewkesbury) においてランカスター軍に追いつき、5月4日の土曜日に戦闘がはじまった。グロスター公は前衛軍司令官として弓兵隊を指揮した。ランカスター軍のサマセット公の前衛部隊が丘陵地を下って突撃したが、撃退されたために、防御態勢が崩れ、ランカスター軍は敗北した。王太子エドワードとデヴォン伯は戦死し、サマセット公らおよそ13名は数日後チュクスベリーの中央広場で処刑された。王妃マーガレットは近くの修道院に潜んでいたが、捕らえられ、ロンドンへ連れていかれた。

4月21日にエドワード四世は、クラレンス公、グロスター公、ノーフォーク公、サフォーク公、バッキンガム公らをともなってロンドンに凱旋した。ロンドン塔に幽閉されていたヘンリー六世は、その夜エドワードの命によって殺害された。グロスター公リチャードがヘンリー六世の殺害に関与したとする説があるが、いずれにせよ国王自身または国王と評議会の決定がなくては実行することはできなかつたであろうとされている。いまやランカスター派は壊滅し、残っているのはウェールズ西部のペンブルック城に拠る豪族ジャスパー・チューダーとその甥ヘンリー・チューダーだけとなり、彼らも国王軍に追われてフランスをめざしたが、悪天候のためにブルターニュに到着した。エドワード四世もルイ十一世も彼らの身柄の引き渡しを要求したが、果たせなかつた。ケント州では「フォーコンバーグの庶子」 (Bastard of Fauconberg) と呼ばれるトマス・ネヴィル (Thomas Neville) が率いるウォリック派の反乱が起こっていたが、グロスター公リチャードは、5月22日に反乱鎮圧軍の司令官に任命され、反乱は27日に完全に鎮

圧された。

グロスター公リチャードは、過去2年間の動乱のなかで首尾一貫して兄エドワードに忠誠を尽くしたので、戦後の論功行賞にあたっては、最大の報償を受けることになった。イングランドの軍察長官と海軍長官の地位を回復したばかりでなく、5月18日にはイングランド式部長官に任命された。これはウォリック伯が占めていた地位である。さらにエドワードはグロスター公リチャードをイングランド北部におけるウォリック伯の権力の後継者の地位にすえ、従来中央政府の支配に服しなかった北部の統治の責任者としたのである。ウォリック伯の長女イザベルの夫であるクラレンス公は、ヨークシャーとカンバーランドにおけるウォリック伯の所領がさらにあたえられることを望んだが、それらはグロスター公にあたえられたばかりでなく、リチャードはウォリック伯の次女アンとの結婚を申し出ている。こうしてクラレンス公とグロスター公のあいだの不和がしだいにおおきくなった。

このころに、バーネットの戦いに敗れてフランスに逃れていたオクスフォード伯ジョン・ド・ヴィアが、ふたりの弟とともにイングランド東南部海岸沿いに侵入の機会をうかがっていたが、1473年9月30日にコーンウォール州沖合のセント・マイケルズ・マウント (St Michael's Mount) を占領した。しかしこの反乱はまもなく不首尾に終わり、オクスフォード伯は翌年2月に赦免されて、カレー近くのアム城塞 (Hamme Castle) に10年間監禁されることになる。この城塞にはヨーク大司教ジョージ・ネヴィルがすでに監禁されていた。この反乱については、クラレンス公が、オクスフォード伯と、さらに伯をつうじてルイ十一世と共謀していたのではないかという根強い疑いが存在した。

(6)

グロスター公リチャードとクラレンス公ジョージの不和は、1471年の論功行賞においてリチャードがうけた優遇をジョージが嫉妬し、憎んだことによって表面化した。クラレンス公は、グロスター公がいまや16歳になった寡婦のアン・ネヴィルとの結婚を望んでいると知ったとき、怒りを抑えることができなかった。クラレンス公は、妻イザベルの権利によってウォリック伯領のすべてをわがものとし、アンを権利を否定するつもりであったからである。1471年から1472年にかけての冬には、両者の対立はひじょうに激しくなって、エドワードが仲裁に入らざるをえなくなり、グロスター公とクラレンス公は評議會の場で言い争うこともあった。グロスター公とアンは、1472年2月12日から3月18日のあいだに結婚したと思われる。その後、クラレンス公と彼を信じていることができないエドワードの関係が緊張したが、1475年のフランス遠征には、クラレンス公もグロスター公とともに、エドワードに同行した。

しかしクラレンス公は1476年12月22日に妻イザベルをウォリック城においてうしなっていたが、翌1477年1月にブルゴーニュのシャルル勇胆公がロレーヌ遠征中にナンシーの攻城戦で戦死し

たとき、クラレンス公の姉のブルゴーニュ公妃マーガレットが、シャルルの娘で女子相続人のブルゴーニュ公女マリー（Mary of Burgundy）とクラレンス公の結婚をエドワード四世に提案したといわれる。エドワードはこの提案を拒絶した。まず第一にブルゴーニュ公家にはイングランド王位請求権があった。シャルルの母ポルトガルのイサベラ（Isabella of Portugal）はランカスター公ジョン・オヴ・ゴントの孫娘であったからである。クラレンス公がブルゴーニュの豊かな財源を手中にすると、またもや陰謀と裏切りに走って、兄エドワードの打倒を企てる恐れがあった。彼はエドワードが庶子であって国王の資格がないといううわさを広めているといわれていた。ルイ十一世もクラレンス公を中傷するもっともらしいうわさを広めてエドワードをたきつけた。結局、この結婚にはエドワードばかりでなく、ルイ十一世、グロスター公、エドワードの友人であるヘイスティングズ卿も強く反対した。クラレンス公は、毒殺を恐れるふりをして、宮廷にあまり姿を見せなくなった。エドワードとクラレンス公はたがいに相手に不信と憎悪を抱くようになり、スコットランド王ジェームズ三世が妹マーガレットとクラレンス公の結婚を提案したときも、エドワードは賛成しなかった。

1477年4月に、クラレンス公は、公妃イザベル毒殺の嫌疑でかつての妻の召使いのひとりをもサマセット州の自宅で捕らえてウォリックに連行し、治安判事による裁判にかけ、有罪判決をえると、彼女を4月15日に処刑させた。治安判事たちは、恐怖のあまり良心に反する判決をくだしたと告白した。このクラレンス公のふるまいは、まるで王権を行使するかのごとくであるとして非難された。ほぼおなじころに、オクスフォード大学の天文学者ジョン・ステイシー博士（Dr John Stacey）が邪悪な目的のために魔術を使ったという嫌疑で逮捕され、拷問によって、クラレンス公家中のトマス・バーデット（Thomas Burdett）や、オクスフォード大学のマートン・コレッジ（ステイシーの属するコレッジ）の司祭でやはり天文学者のトマス・ブレイク（Thomas Blake）とかかわりをもっていることを自白した。エドワード四世は、1477年4月12日に巡回裁判による審理を命じ、裁判官たちは、5名の伯を含む17名の貴族と6名の判事から構成されていた。嫌疑は、これらの者が魔術を使って国王と王太子の死を企んだというものであった。トマス・バーデットはさらに反逆罪にあたる文書を配布して反乱を使喚したという罪を問われた。5月19日、三人とも有罪判決を受けて、タイバーンで処刑されることになった。ブレイクは、土壇場でエドワードの評議会議員であるノリッジ司教ジェームズ・コールドウェル（James Coldwell）が介入して助命されたが、他のふたりは処刑された。この裁判はあきらかにクラレンス公にたいする警告であったが、公はこれを無視した。

クラレンス公は、エドワードがウィンザー城に滞在中に、ウェストミンスターにおける評議会の席に乱入して、バーデットとステイシーがしたためていた無実を主張する声明書を、フランススコ会の説教師のジョン・ゴダード博士（Dr John Goddard）に読み上げさせた。このゴダードなる者は、1470年9月にヘンリー六世の王位要求の正当性をポールズ・クロスで説明した人物であった。エドワード四世はクラレンス公の反抗的な行動に怒り、ウェストミンスター

に戻ると、ロンドン市長・市参事会員たちの同席するなかで、クラレンス公を王国の法を侵犯した罪に問うた。クラレンス公は、1477年6月末に逮捕され、ロンドン塔に拘禁された。翌1478年1月19日にウェストミンスターに議会が召集され、エドワード四世はみずからクラレンス公を弾劾する議案を説明し、王国の安全は公の処罰を要求していると述べ、大逆罪の判決と爵位と所領の剥奪をもとめた。クラレンス公は無罪を主張して、古来の決闘裁判によって無実を証明することを要求した。正式の死刑判決を言い渡すために、2月7日にバッキンガム公が任命され、2月18日にクラレンス公はロンドン塔内で処刑された。クラレンス公の死によって、グロスター公リチャードは、イングランドにおいて国王に次いで最大の権力者となった。

エドワード四世による1475年のフランス遠征は、ピキニーの和約 (Treaty of Picquigny, 8月29日) と総称される結果をもたらした。これによって、両国のあいだに7年間の休戦協定がなり、エドワード四世は7万5000クラウン (1万5000ポンド) を受け取ってフランスから撤退し、ルイ十一世はエドワードに5万クラウン (1万ポンド) の年金をロンドンで復活祭とミカエル祭 (9月29日) に2分割で支払うことになった。またフランスの王太子シャルルとエドワードの長女エリザベス・オヴ・ヨークの結婚が約され、万一エリザベスが死亡した場合は妹メアリーがこれにかかわることになった。1475年9月には、マーガレット・オヴ・アンジューの身柄をめぐって、ルイが5万クラウンの身代金を支払うことになり、マーガレットはイングランド王位にたいするあらゆる要求権とみずからの寡婦産を放棄することが同意され、彼女は翌1476年1月にフランス側に引き渡されたが、フランスでの自由を得るために父アンジュー公ルネと母イサベラ・オヴ・ロレーヌの遺産を放棄しなければならなかった。彼女はその後の6年間をフランス王からのささやかな年金で暮らし、1482年8月25日に他界した。

(7)

エドワード四世は、前述のとおり、1464年5月1日にノーサンプトンシャーのグラフトン・リージス (Grafton Regis) においてエリザベス・ウッドヴィルと結婚した。エリザベスは、最初1452年ころにサー・ジョン・グレイ・オヴ・グロービー (Sir John Grey of Groby) と結婚し、ふたりの男子をもうけていた。

1. トマス (Thomas, c 1455-1501) ドーセット侯。(1) アン (Anne, c 1455-75) と結婚。

アンは、エクセター公ヘンリー・ホランドとエドワード四世の姉アンの娘である。(2)

ハリントン男爵ウィリアム・ボンヴィル (William Bonville, Baron Harington) の娘と結婚。

2. リチャード (Richard, 1456?-83) 勲爵士。刑死。

エドワードとエリザベスのあいだには10人の子が生まれた。

1. 長女エリザベス (Elizabeth) 1466年2月11日にウェストミンスター宮殿で生まれる。

1486年1月18日にウェストミンスター修道院でヘンリー七世 (Henry VII, 在1485-1509)

と結婚。1487年11月25日にウェストミンスター修道院でイングランド王妃として戴冠。
1503年2月11日にロンドン塔で死亡。ウェストミンスター修道院に埋葬される。

2. 次女メアリー (Mary) 1467年8月11日にウィンザー城で生まれる。1480年にガーター貴婦人 (Lady of the Garter) に叙される。1482年5月23日にケント州のグリニッジ宮殿で死亡。ウィンザー城のセント・ジョージ礼拝堂に埋葬される。

3. 3女セシリア (Cecilia) またはセシリー (Cecily) 1469年3月20日にウェストミンスター宮殿で生まれる。(1) 1487年11月25日と1488年1月1日のあいだにガーター勲爵士・初代ウェルズ子爵ジョン・ウェルズ (d.1498) と結婚。2女をもうける。(2) 1502年5月13日と1504年1月のあいだにトマス・カイク (Thomas Kyme) と結婚。1480年にガーター貴婦人に叙される。1507年8月24日にワイト島のクウォー修道院 (Quarr Abbey) で死亡し、そこに埋葬される。

4. 長男エドワード (Edward) 1470年11月1日 (または2日または4日) にウェストミンスター修道院の聖域で生まれる。1471年6月25日 (または26日) に王太子 (Prince of Wales) とチェスター伯 (Earl of Chester), 7月17日にコーンウォール公 (Duke of Cornwall) に叙される。1475年5月15日にガーター勲爵士。1479年7月8日 (または18日) にマーチ伯 (Earl of March), ペンブルック伯 (Earl of Pembroke) に叙される。1483年4月9日に父エドワード四世の後継者としてイングランド王エドワード五世として即位。1483年6月25日に議会制定法により庶出と宣言され、同日廃位される。1483年7月にロンドン塔内で姿が見られたのを最後に消息不明となる。

5. 4女マーガレット (Margaret) 1472年4月10日にウィンザー城で生まれ、同年12月11日に死亡。ウェストミンスター修道院に埋葬される。

6. 次男リチャード (Richard) おそらく1473年8月17日にシュロップシャーのシュローズベリーのドメニコ会修道院で生まれる。1474年5月28日にヨーク公 (Duke of York) に叙される (これより国王または女王の次男がヨーク公に叙される慣習がはじまった)。1475年5月15日にガーター勲爵士, 同年バス勲爵士。1476年6月12日にノッティンガム伯 (Earl of Nottingham) に, 1477年2月7日にノーフォーク公 (Duke of Norfolk), サリー・アンド・ワーレン伯 (Earl of Surrey and Warenne) に叙される。1483年6月26日に議会制定法により庶出と宣言され, 同日爵位を剥奪される。1483年7月にロンドン塔内で姿が見られたのを最後に消息不明となる。1478年1月15日にウェストミンスター宮殿のセント・スティーヴン礼拝堂でアン (Anne) と結婚。アンは, ノーフォーク公ジョン・モーブレイと, 第2代シュローズベリー伯ジョン・トールボット (John Talbot, 2nd Earl of Shrewsbury) の娘エリザベスの娘として, 1472年12月10日にサフォーク州のフラムリングム城 (Framlingham) で生まれ, 父の死後1476年1月16日または17日にノーフォーク女伯 (Countess of Norfolk) に叙される。1481年1月16日と11月19日のあい

だにグリニッジ宮殿で死亡し、ウェストミンスター修道院に埋葬された。

7. 5女アン (Anne) 1475年11月2日にウェストミンスター宮殿で生まれる。1495年2月4日にグリニッジ宮殿でハワード卿トマス (Thomas, Lord Howard, 1473-1554) と結婚。のちのサリー伯 (Earl of Surrey), ノーフォーク公 (Duke of Norfolk) である。1511年11月22日以後1513年までに死亡し、ノーフォーク州のセットフォード修道院 (Thetford Priory) に埋葬され、遺体はのちにサフォーク州のフラムリンガム教会へ移された。

8. 3男ジョージ (George) おそらく1477年3月に (1478年1月以前に) ウィンザー城またはシュロップシャーのシュローズベリーのドメニコ会修道院で生まれ、おそらくベッドフォード公 (Duke of Bedford) に叙された。1479年3月にウィンザー城で死亡し、セント・ジョージ礼拝堂に埋葬された。

9. 6女キャサリン (Katherine) 1479年8月14日にケント州のエルトム宮殿 (Eltham Palace) で生まれる。1496年10月ころにウィリアム・コートニー (William Courtney, 1475-1511) と結婚。のちのデヴォン伯である。2男1女をもうける。1511年に寡婦となり永久の貞節の誓いをたてる。1527年11月15日にデヴォン州のティヴァトン城 (Tiverton Castle) で死亡し、ティヴァトン教区教会に埋葬される。

10. 7女ブリジット (Bridget) 1480年11月10日または20日にケント州のエルトム宮殿で生まれた。1487年ころに (1492年以前に) ケント州のダートフォード修道院 (Dartford Priory) で修道女となる。1513年以前に死亡し、同修道院に埋葬される。

エドワード四世には4人の庶出の子がいた。

1. エドワード・ド・ウィグモア (Edward de Wigmore) 1468年に幼時に死亡。

母はエレナー・トールボットまたはバトラー (Eleanor Talbot or Butler, d.1468) で、エドワードは彼女と結婚していたと主張された。

2. アーサー・プランタジネット (Arthur Plantagenet, 1461/64-1542) ライル子爵。

母はエリザベス・ルーシー (Elizabeth Lucy), 旧姓ウェイト (Waite)。彼女はエリザベス・ショー (Elizabeth Shore) と呼ばれ、時にはジェイン・ショー (Jane Shore) と誤って呼ばれている。

3. エリザベス (Elizabeth) 1464年ころに生まれる。おそらくトマス・ラムリー (Thomas Lumley) と結婚。母はエリザベス・ルーシーとされている。

4. グレイス (Grace) 1492年に生存。母は不詳。

エドワード四世は、1483年4月9日にウェストミンスター宮殿で急病によって死去した。エドワードの3男ジョージは1479年に死亡していたので、嫡男としては12歳の長男エドワードと9歳の次男リチャードがいた。他の王族ではエドワード四世の末弟グロスター公リチャードが

いた。王太子エドワードとヨーク公リチャードは伯父のリヴァーズ伯アントニー・ウッドヴィルとともにウェールズ辺境のラドロー城におり、エドワードの即位が4月11日に宣言された。グロスター公リチャードは対スコットランド戦争のために北方のヨークシャーのミドラム城にいた。王妃エリザベスはドーセット侯トマス・グレイとともにロンドンにいた。またロンドンにはバッキンガム公ヘンリー・スタフォード、イングランド式部官ヘイスティングズ卿ウィリアムがおり、後者はミドラム城のグロスター公にエドワードが彼を摂政に任命したので、エドワード五世の身柄を至急確保し、兵を率いてロンドンへ向かうように連絡した。宮廷においてエドワード四世の臨終に立ち会った貴族たちは、バッキンガム公やヘイスティングズ卿のように、国政の運営にあたってはエドワード四世の遺志を尊重して摂政が統治すべきであると主張して、グロスター公を支持するグループと、ウッドヴィル一族やグレイ一族のように、評議会が統治にあたるべきであり、摂政は評議会の議長をつとめればよいと主張して、グロスター公の権力を制限しようとするグループに分かれた。

権力掌握のために最初に行動したのはウッドヴィル＝グレイ派であった。彼らは必要ならば武力によって権力を維持しようとして、いち早く海軍を支配下におさめ、ロンドン塔内の武器と王室財宝をおさえるとともに、エドワード五世の戴冠式を早期に挙行しようと、期日を5月4日と決定して、リヴァーズ伯にエドワードを護衛する軍勢を指揮してロンドンへ帰還するよう命令を発した。彼らはグロスター公を除外した臨時政府を組織しようとしたのである。

ヘイスティングズ卿らは、ウッドヴィル派に対抗して、ロンドンへ帰還するエドワード五世の護衛隊の兵員を制限することをつよく主張し、もし受け入れられなければ、カレー守備隊にたよると威嚇したために、王太后エリザベスも譲歩せざるをえなかった。ラドロー城ではエドワード五世は4月23日にリヴァーズ伯らと聖ジョージの祝日を祝ったのちに、翌4月24日に国王一行は、ウスター司教ジョン・アルコック (John Alcock, Bishop of Worcester, 1430-1500)、サー・トマス・ヴォーン、サー・リチャード・オート (Sir Richard Haute)、そして2000名の護衛隊とともに、ロンドンへ向かって出発した。グロスター公は、ヨークシャーの貴族とジェントリーをヨークに参集させ、新国王にたいする忠誠の誓約を立てさせ、みずからも王太后と評議会へエドワードにたいする忠誠を表明する書簡を送った。この書簡の内容はロンドンにいる貴族たちのあいだに伝わり、これによって彼らのなかにはリチャードに好感を抱いた者もいた。この段階では、リチャードにはまだ何の権威もあたえられておらず、またウッドヴィル派による権力掌握も阻止されていたのである。

リチャードは4月20日以後にロンドンへ向かって出発し、4月29日にノーサンプトンで3000の軍勢を率いたバッキンガム公と合流した。両公はここでウッドヴィル派にたいする対策を検討した。他方、国王一行もノーサンプトン経由の進路をとり、ちょうどそのころ近くの村ストーンリー・ストラトフォード (Stony Stratford) に達していた。リヴァーズ伯は29日の夕方にグロスター公とバッキンガム公にノーサンプトンでの食事に招かれたが、このときにウッドヴィ

ル派がロンドンを制圧している状況をグロスター公に伝えたと思われる。翌朝になってリヴァーズ伯は逮捕され、その後グロスター公とバッキンガム公はストーンリー・ストラトフォードにいるエドワード五世のもとへ行き、国王の身柄を確保し、従者たちを解職し、エドワードの異父兄サー・リチャード・グレイの他に、サー・トマス・ヴォーン、サー・リチャード・オートらを逮捕した。グロスター公は、国王に、ウッドヴィル一族がエドワード四世を放蕩へ誘って墮落させたこと、彼らが陰謀によって自分の命をおびやかしたこと、またエドワード四世が自分にあたえた摂政の地位を奪おうとしたために彼らを逮捕せざるをえなかったことを説明した。エドワードは抗議し、勇敢に側近たちを弁護したが、結局叔父に従うことを余儀なくされた。逮捕されたリヴァーズ伯らはそれぞれヨークシャー各地のグロスター公の城に監禁された。(彼らは6月25日にポンテフラクト城で処刑される。)国王の護衛隊は解散を命じられて、エドワードと弟のヨーク公リチャードはグロスター公とバッキンガム公の保護のもとに、ウッドヴィル派が戴冠式に予定していた5月4日になってようやくロンドンに到着し、緋色の礼服に身を包んだ市長と市参事会員たち、約500名の市民たちに迎えられた。グロスター公としては、ウッドヴィル一族によるクーデターの機先を制する必要があったのである。

ノーサンプトンの事件の知らせは、すでに4月30日にロンドンに届いていた。王太后エリザベスその他のウッドヴィル一族は、ウェストミンスター修道院の聖域に逃れ、また海外へ亡命する者もいた。ロンドン塔を掌握していたドーセット侯はエドワード五世を奪回するために軍勢を募ろうとし、サー・エドワード・ウッドヴィルは艦隊を集結させようとした。他方、ヘイステイングズ卿も軍勢を集めたので、ロンドンの情勢は緊迫した。

グロスター公は5月4日にロンドンへ入るとすぐに貴族たちに新国王への忠誠を誓わせたので、ロンドン市民たちはグロスター公を称賛したが、彼の意図に疑念を抱く貴族たちは安心しなかった。しかしエドワード五世が帰還し、グロスター公の新国王への忠誠が明らかにされたので、ウッドヴィル派の軍事行動による政権掌握は不可能となった。グロスター公は5月7日にベイナード城へもどり、10日には評議会によって正式に摂政の地位を確認され、これによってエドワード五世と評議会を支配下におくことができた。またこの評議会は戴冠式を6月22日の日曜日と決定した。エドワード五世はロンドン司教公邸からロンドン塔へ移り、ヨーク公リチャードは王太后のもとに移った。

グロスター公は摂政の権限によって政府高官の任免を行ない、尚書部長官には、ヨーク大司教トマス・ロザラム(Thomas Rotherham, 1423-1500)にかわって、リンカン司教ジョン・ラッセル(John Russell)が任命された。ロザラムは、前後20年にわたって(1480-1500)ヨーク大司教をつとめた当時の著名な高位聖職者であるが、エドワード四世の忠実な臣下として、王太后がウェストミンスター修道院の聖域に入る前に国璽を手渡したことがあった。ジョン・ラッセルの後任の玉璽尚書にはウェルズの首席司祭ジョン・ガンソープ(John Gunthorpe, d. 1498)が任命された。財務府長官には庶民院議長サー・ジョン・ウッド(Sir John Wood)が

就任した。リチャードは、できるかぎりエドワード四世の王室府の要職にいた人びとの支持をえようとつとめた。バッキンガム公は、ウェールズ北部および南部、イングランド西部および西南部において広範な司法・行政権をあたえられ、ウェールズにおいては事実上総督の地位をえた。ノーサンバランド伯ヘンリー・パーシーは対スコットランド防衛のための東部辺境司令官とベリック＝アポン＝トウィード守備隊司令官に、ハワード卿ジョンはランカスター公領の主席執事にそれぞれ任命された。ヘイスティングズ卿は特別の恩賞を受けなかったが、かつてつとめた造幣局長官に任命されたほかに従来のイングランド式部長官、カレー副総督の地位を確認された。こうして摂政グロスター公の支持者たちが、宮廷、政府、地方統治の要職に配置された。

しかし王太后を中心とするウッドヴィル派の陰謀にたいする懸念が依然として存続し、また、政府高官相互のあいだにも十分な信頼関係があったわけではなく、評議会もグロスター公、バッキンガム公、ハワード卿を中心として運営されたので、グロスター公の意向につねに従ったわけではなく、摂政に批判的な勢力も台頭した。このため5月下旬からはグロスター公派がベイナード城、のちにはクロズビー・プレイスで会合したのにたいし、反グロスター派のヘイスティングズ卿、ヨーク大司教、イーリー司教ジョン・モートン (John Morton, Bishop of Ely, 1420?-1500) らはウェストミンスターで会議を開き、彼らはスタンリー卿トマス (Thomas, Lord Stanley, 1435?-1504) の支持をえていた。このような状況に対処するために、グロスター公は、6月10日にヨーク市へ書簡を送り、北部の貴族たちに軍勢の派遣をもとめた。

このようななかでヘイスティングズ卿が、愛人のエリザベス (ジェイン)・ショーをつうじてウッドヴィル派と気脈をつうじ、ドーセット侯と陰謀をめぐらせて摂政の打倒を計ったと非難されることになった。ヘイスティングズ卿は、バッキンガム公、ノーサンバランド伯、ハワード卿ジョン、ラヴェル卿フランシスらへの恩賞があまりにもおおきかったことを恨んで、リチャードから離反したのかもしれない。あるいはグロスター公の摂政の任期を延長しようとする計画に反対であったのかもしれないし、公の真の意図に疑惑を抱き、ウッドヴィル派に助けをもとめた可能性もある。グロスター公は、6月13日に評議会のふたつの会議を召集し、ひとつはウェストミンスターで開かれ、尚書部長官のもとに戴冠式の準備を議題とし、もうひとつは緊急の政治問題を議題としてロンドン塔で行なわれて、ここへヘイスティングズ卿と彼の支持者たちが召集された。ハワード卿ジョンの子トマス・ハワードが率いる武装兵たちが近くの部屋で待機していた。グロスター公は、王太后と共謀して謀反を企てたとしてヘイスティングズ卿を非難し、卿は兵士たちによって捕らえられて弁明の機会もあたえられないままタワー・ヒルで処刑された。ヨーク大司教、イーリー司教、スタンリー卿も逮捕されてロンドン塔に監禁されたが、スタンリー卿はすぐに釈放された。王太后エリザベスとエリザベス・ショーは妖術を用いたとされた。エリザベス・ショーはジェイン・ショー (Jane Shore) の名で知られる女性で、さらにのちにドーセット侯の愛人となるが、1450年にチープサイドの裕福な絹物商人

の娘として生まれ、ロンバード・ストリートの金細工職人ウィリアム・ショーと結婚したが、グロスター公妃アンがロンドン滞在中に侍女をつとめていた1470年ころに、その美貌によってエドワード四世の愛人となり、いまではヘイスティングズ卿の愛人となっていたのである。

ついでグロスター公は6月16日にロンドン塔で開かれた評議会において、ヨーク公リチャードをウェストミンスター修道院の聖域から連れ出すことを提案した。ヘイスティングズ卿の処刑後はもはやグロスター公に反対する評議官はおらず、枢機卿・カンタベリー大司教トマス・バウチャーが使節団長に選ばれ、修道院で王太后を説得してヨーク公をグロスター公のもとに届けた。大司教は、ヨーク公は戴冠式後に王太后のもとにもどされると約束したと思われる。彼としてはなんとしても聖域の侵犯を阻止したかったともいわれる。いずれにせよ、このときには王太后自身は聖域を出るつもりはなく、また王女たちも出していない。こうしてヨーク公は、兄エドワード五世とともにグロスター公の保護下にロンドン塔に居住することになった。クラレンス公の遺児ウォリック伯エドワード (Edward, Earl of Warwick) はすでにグロスター公妃アンの手元に託されていた。

その翌17日には、6月22日に召集されていた議会の開会を中止する令状が発せられ、エドワード五世の戴冠式の準備も中止された。リヴァーズ伯、サー・リチャード・グレイ、サー・トマス・ヴォーン、サー・ウィリアム・オートらの処刑の命令が送られたのもこのころである。またバース・アンド・ウェルズ司教ロバート・スティリントン (Robert Stillington, Bishop of Bath and Wells) はエドワード四世の遺児たちは正嫡ではないという意見をグロスター公に告げた。彼によれば、エドワード四世が1464年にエリザベス・ウッドヴィルと結婚したとき、エドワードはすでにレイディ・エレナー・バトラー (Lady Eleanor Butler) と結婚していたというのである。したがってエドワードとエリザベスの結婚は正当ではなく、彼らの子は庶出であるというのであった。6月22日の日曜日には、セント・ポール大聖堂の礼拝集会において、ケンブリッジ大学の神学者でグロスター派のレイフ・ショー (Ralph Shaw, d.1484) がポールズ・クロスで説教し、エドワード四世の遺児たちには王位継承権がないことを説き、グロスター公のイングランド王位要求の正当性を主張した。この人物は、当時のロンドン市長エドモンド・ショー (Edmund Shaw, d.1487) の弟である。しかしロンドン市民はこの説教にたいして冷淡であり、激しい反発をしめす者もいた。ついでバッキンガム公が6月24日にギルドホールにおいて市参事会員たちに、翌25日には戴冠式と議会のためにロンドンに出てきた貴族やジェントリーの集会において演説し、グロスター公の王位継承の正当性を説き、この集会はグロスター公の王位継承を求める請願書を起草した。翌26日にバッキンガム公は、ふたたび集会を開いて請願書を確認すると、ロンドン市長、市参事会員その他の有力市民をともなってヨーク公妃セシリー・ネヴィルのロンドン邸宅であるベイナード城へ行き、そこで摂政グロスター公に請願書を献呈した。グロスター公は躊躇したが、けっきょく承諾し、ただちにウェストミンスター・ホールへ行き、大理石の玉座に座った。グロスター公の戴冠式は7月6日の日曜日と定められた。

このころにはグロスター公が各地から呼びよせた軍勢がロンドンに到着しており、市街は戒厳状態におかれていた。ロンドン市民は、もともとウッドヴィル一族の専横を嫌っていたが、ロンドン市長兄弟が有力市民たちの支持を獲得したために、その影響によっていまではグロスター公の王位継承を支持していた。

グロスター公は6月27日に政府高官の任免に着手した。ハワード卿ジョンはノーフォーク公に叙され、陸軍長官に任命され、また戴冠式のためのイングランド執事に任命された。息子トマスはサリー伯に叙された。サー・ウィリアム・バークリー (Sir William Berkeley) はノッティンガム伯に叙された。尚書部長官ジョン・ラッセル、財務府長官ジョン・ウッド、玉璽尚書ジョン・ガンソープは留任した。サー・ウィリアム・ケイツビー (Sir William Catesby, d. 1486) は財務府尚書に任命された。ライル卿エドワード (Edward, Lord Lisle) は子爵に叙された。

こうしてグロスター公は、1483年7月6日にリチャード三世として即位した。戴冠式においてはバッキンガム公がみずから儀典長の役目をつとめて、ノーフォーク公にたいする優位をしめした。バッキンガム公妃キャサリン・ウッドヴィル (Catherine Woodville) は戴冠式に欠席した。キャサリンは処刑されたリヴァーズ伯アントニー・ウッドヴィルや皇太后エリザベスの妹である。ちなみにキャサリンは、バッキンガム公が処刑されたのちに、ベッドフォード公ジャスパー・チューダー (Jasper Tudor, Duke of Bedford) と再婚し、彼が1495年に死去したのちにサー・リチャード・ウィングフィールド (Sir Richard Wingfield) と3度目の結婚をしている。戴冠式に出席した他の主要な人物は、サフォーク公ジョン・ド・ラ・ポール、ノーサンバランド伯ヘンリー・パーシー、アランデル伯ウィリアム・フィッツアラン、ノッティンガム伯ウィリアム・バークリー、ウォリック伯レイフ・ネヴィル、リンカン伯ジョン・ド・ラ・ポール、ハンティンドン伯ウィリアム・ハーバート、ウルトシャー伯ジェイムズ・バトラー、ケント伯エドマンド・グレイ、サリー伯トマス・ハワード、ライル子爵、ラヴェル子爵らであった。ウッドヴィル派は別として、貴族やジェントリーのおおくが、従来中立的な立場をとっていた者を含めて、リチャード三世の即位を支持した。特に、リチャードがグロスター公時代に勢力を築いていたイングランド北部の貴族およびその軍勢がリチャードを強力に支持し、またロンドン市もリチャード支持に転じたのであった。

さらに注目すべきは、バッキンガム公とハワード卿ジョンがリチャード三世の王位継承を強力に推進したが、彼らはエドワード四世時代に不遇であって不当な扱いさえ受けているのであり、それ故にエドワード五世を積極的に支持せず、グロスター公支持にまわったのである。バッキンガム公がエドワード四世にたいして不満を抱いた理由は、所領の相続権の問題であった。バッキンガム伯の爵位は、1377年に、エドワード三世の第7男トマス・オヴ・ウッドストック (Thomas of Woodstock, のちにグロスター公) にあたえられ、その子ハンフリー (Humphrey) が継承したが、ハンフリーが死去したとき、妹アン (トマス・オヴ・ウッドストックの娘) とその夫エドマンド・スタフォードの子ハンフリー・スタフォード (Humphrey Stafford) が継

承した。このハンフリーがヘンリー六世によって1444年に初代バッキンガム公に叙され、スタフォード家はイングランドで有数の大貴族となった。ところでトマス・オヴ・ウッドストックの夫人エレナー・オヴ・ブーン (Eleanor of Bohun) はヘンリー四世の最初の王妃メアリー・オヴ・ブーン (Mary of Bohun) の姉であり、エレナーとメアリーはウェールズ辺境地域の広大なブーン家所領の女子共同相続人であった。エレナーの娘アンはブーン家所領の半分を相続した。初代バッキンガム公ハンフリー・スタフォードはランカスター派としてヨーク公リチャードと戦ったが、ノーサンプトンの戦いで戦死した。彼の長男はすでに1458年に死去していたので、当時5歳か6歳であった孫ヘンリー・スタフォードが1460年に第2代バッキンガム公となったのである。ヘンリーはエドワード四世の時代の1464年に王妃エリザベス・ウッドヴィルの後見のもとにおかれ、前述のとおり、王妃は1466年に妹キャサリン・ウッドヴィルとヘンリーを結婚させた。しかしヘンリーはのちにウッドヴィル家との縁組みを後悔したといわれる。1471年にヘンリー六世が没してランカスター家の相続人が絶えたとき、バッキンガム公ヘンリー・スタフォードはブーン家所領のランカスター家相続分の相続権を主張した。ところがエドワード四世は、これを認めず、かえってバッキンガム公の相続権を剥奪してしまった。

バッキンガム公にたいするエドワード四世の冷遇は、ウェールズ辺境地域におけるウッドヴィル家の勢力増強策の結果でもあった。15世紀のウェールズははなはだしく混乱していたが、西部と北西部はカマーゼン (Carmarthen) とカーナーヴォン (Caernarvon) を中心としてウェールズ大公 (王太子) 領の諸州であった。他の地方は、15世紀後半にはヨーク公、バッキンガム公、ウォリック伯らのイングランドの大貴族の支配下に入り、彼らの貴重な収入源となった。1471年ころには、ハーバート家 (ペンブルック伯) が南部と西部を支配し、トールボット家 (シュローズベリー伯) が北部を勢力範囲としていた。これにたいし、ウェールズ辺境地域のイングランド諸州のうち王室領以外は、スタンリー家が北部を、スタフォード家 (バッキンガム公) が中南部を支配していた。このように、ウェールズ辺境地域の中南部は、北部ミッドランド地方とともに、もともとスタフォード家の勢力の基盤であったにもかかわらず、1471年にエドワード四世の王子エドワードが王太子、チェスター伯、コーンウォール伯に叙されると、王太子評議会が設置され、リヴァーズ伯がウェールズ大公領長官に、ウスター司教ジョン・アルコックが王太子評議会議長、サー・トマス・ヴォーンが王太子府出納長に任命されるなど、ウッドヴィル家とその同盟者たちが支配的地位についた。1473年に王太子評議会にあらたに10名の新評議官が任命されたときも、バッキンガム公は含まれていなかった。さらに、1473年に第3代シュローズベリー伯ジョン・トールボットが死去したとき、未成年相続者であったジョージの後見権とランカスター公領の官職はすべてヘイスティングズ卿にあたえられ、バッキンガム公は無視されたのである。バッキンガム公のグロスター公支持の背景は、以上のとおりである。

ハワード卿ジョンの場合も、所領問題にかんしてエドワード四世にたいする不満があった。ハワード家は13世紀以来のノーフォーク州の名家であり、ジョンの父サー・ロバート・ハワー

ドは初代ノーフォーク公トマス・モーブレイの娘でモーブレイ家の女子共同相続人マーガレットと結婚し、モーブレイ家所領の相続権の一部を獲得した。モーブレイ家では第4代ノーフォーク公ジョンの死(1476)後、後継者がなく、ジョンの娘アン(Anne Mowbray, 1472-81)も9歳の誕生日の数日前に(または8歳になったばかりで)没したので、ノーフォーク公位は初代ノーフォーク公の娘マーガレットの子孫であるハワード家へ移った。モーブレイ家所領は当時第2代ノーフォーク公ジョンの未亡人キャサリン・ネヴィル(エドワード四世の母セシリーの姉)によって管理されていたけれども、イングランドでもっとも裕福な女子相続人となったアン・モーブレイ(ノーフォーク女伯)は、前述のとおり、エドワード四世の次男ヨーク公リチャードと1478年に結婚していた。しかし彼らのあいだには子がなかったので、コモン・ローによれば、ヨーク公にはアンが相続したモーブレイ家所領にたいする相続権がなく、共同相続人であったハワード卿ジョンとパークリー子爵ウィリアムに相続権があった。ところがエドワード四世が介入して、モーブレイ家所領を無理にヨーク公に相続させ、この相続は1483年1月の議会制定法によって承認されてしまったのである。

(8)

リチャード三世は、国政の運営にあたってはできるかぎりエドワード四世時代の家臣団を登用し、みずからの支配体制を確立しようとした。評議会議員も54名のうち26名はエドワード四世時代の議員が再任された。またリチャードに忠誠を誓えば、従来政敵につながる者をも任用している。地方統治については、イングランド北部をノーサンバランド伯に、イングランド東部をノーフォーク公に、西部のウェールズ辺境地域はバッキンガム公に委任して統治にあたらせた。これらの大貴族のもとでそれぞれの地域の貴族やジェントリーが各地方の統治にあたった。

リチャード三世は、1483年7月6日に戴冠式を挙行了のちに、7月21日ころに全国巡遊の旅に出発した。随行団のなかには、5名の司教、サリー伯トマス・ハワード、ハンティンドン伯ウィリアム・ハーバート、リンカン伯ジョン・ド・ラ・ポール、ウォリック伯レイフ・ネヴィル、4名の男爵、そして王座部裁判所長サー・ウィリアム・ハッシー(Sir William Hussey)らがいた。バッキンガム公は、グロスターを出発するまで国王一行とともにいたが、その後ウェールズの所領へ帰ったらしい。王妃アンにもおおぜいの貴婦人の女官たちが随行していた。リチャード三世は、7月23日にレディングでヘイスティングズ卿の未亡人キャサリン・ネヴィルと和解した。キャサリンは、ソールズベリー伯リチャード・ネヴィルの娘であり、ウォリック伯リチャード・ネヴィルの妹であるので、リチャード三世にとっては母方の従姉であり、王妃アンにとっては母方の叔母にあたる。ついで24日にはオクスフォードに着き、あらたに創設されたモードリン・コレッジにおいて創設者のウィンチェスター司教ウィリアム・オヴ・ウェ

インフリート (William of Waynflete) によって歓待された。彼はヘンリー六世時代に尚書部長官をつとめた人物で、ランカスター派の高位聖職者としては司教職にとどまっているきわめて少数のひとりであった。リチャードはいくつかのコレッジを訪れ、学問的な議論に参加し、学者たちは気前のいい贈り物を受けた。オクスフォード滞在中に近くにウッドストックの王室狩猟場を訪れ、エドワード四世が不法にウィチウッドの御料林に併合していた土地を普通地にもどしたいという住民の請願を聞き届けた。さらに西方へ進んでグロスターでは、みずからの以前の公爵名と同名の都市であるという理由で、ロンドン、ヨーク、ブリストル、コヴェントリーと同様の、独自の市長・州長官をもつことができる自治都市の特権をあたえた。北へ進んでチェクスベリーでは、兄クラレンス公とその公妃イザベル・ネヴィル、ヘンリー六世の王太子エドワード (王妃アンの最初の夫) らが埋葬されているチェクスベリー修道院を訪れ、クラレンス公の所領から310ポンドを寄進した。一行は8月はじめにウスターに達し、ウスターは、ロンドンやグロスターの例にならって、行幸の費用をまかなうための献金を申し出たが、リチャードは謝絶し、自分が欲するのは金よりも人びとのこのころであると述べた。国王一行は、8月7日にウォリックに入り、その後ゆっくりとコヴェントリー、レスターを經由して8月19日にノッティンガムに到着した。ここではエドワード四世が着手していた城の改修を完成し、ノッティンガム城はリチャードの気に入りの居城となる。

ヨーク市は、リチャードがウォリック伯リチャード・ネヴィルの所領のほとんどを受けついで、彼の勢力基盤を確立したイングランド北部の中心都市であったので、彼がヨークへの入市をできるかぎり華麗な祝典によって果たしたいと考えたのは当然であった。国王秘書官ジョン・ケンダル (John Kendall) はヨークの市長と市参事会員たちに国王と王妃一行を歓迎するための式典について書簡を送り、70名の北部の騎士とジェントリーたちがポンテフラクト城に召集されて、豪華な供回りに加わることになった。またミドラム城にいたリチャードの王子エドワードもポンテフラクト城で一行に合流することになった。リチャード三世は、8月30日または31日にヨーク市へ入り、全市をあげての歓迎を受け、9月8日にはヨーク大聖堂において王子エドワードが騎士に叙され、王太子 (ウェールズ大公) として認証された。リチャードの庶子ジョン・オヴ・グロスター (John of Gloucester) も騎士に叙された。9月17日にリチャード三世は財務府に納入されるべきヨーク市の年間定額地代を160ポンドから100ポンドに減額し、忠実な市民たちに報いた。

リチャード三世はまた、ヨークシャーにおいて特にヨーク家やネヴィル家と、また王室の城塞や王領地と関係の深い教会や修道院に寄付や下賜金をあたえた。ミドラム城近くのクヴァラム修道院 (Coverham Abbey) は教会再建費20ポンドを、バーナード城 (Barnard Castle) の教会は40ポンドと100マークの寄進を受けた。ポンテフラクトの小修道院は、エドワード四世が没収した土地の回復を認められた。この小修道院は、リチャード三世の父ヨーク公リチャードがウェイクフィールドの戦いで戦死したのちに、その遺体がフォザリンゲイ城に再埋葬される

まで何年間も安置されていたところである。またウェイクフィールドの数マイル南にあるホームファース (Holmfirth) は、司祭出張礼拝堂の司祭維持費用年間2ポンドの下賜金の継続を確認された。ヨーク近郊のウィルバーフォス (Wilberfoss) の女子修道院は、国王、王妃、王族の霊を弔うための特別礼拝堂建設のための土地をあたえられた。(寄付と下賜の記述は、ロス【リチャード三世】p.151による。)

リチャード三世は、グロスター公時代の、一説によれば1472年7月12日に(1474年とする説もある) ウェストミンスター修道院でアン・ネヴィルと結婚した。アンは、ウォリック伯リチャード・ネヴィルと、ピーチャム家系のウォリック伯リチャード・ド・ピーチャムの娘アンのあいだの次女として、1456年6月11日にウォリック城で生まれた。アンは、前述のとおり、最初はフランスのアンボワーズ城で1470年12月13日にヘンリー六世の王太子エドワードと結婚した。リチャード三世と王妃アンのあいだに生まれたのは、王子エドワードだけである。エドワードは、1473年12月ころに(あるいは1476年に) ミドラム城で生まれ、1478年2月にはソールズベリー伯に、リチャードが即位した1483年6月26日にコーンウォール公に叙され、同年8月24日には王太子となり、チェスター伯に叙され、上述のとおり、ヨーク大聖堂において9月8日に王太子として認証された。リチャード三世にはアンとの結婚以前に生まれた庶出の子が7名いたらしいが、そのうちの3名は次のとおりである。

1. ジョン・オヴ・グロスターまたはジョン・オヴ・ポンテフラクト (John of Pontefract, 1470ころ-1499?) 1483年9月8日に騎士に叙され、1485年3月11日にはカレー守備隊司令官に任命された。殺害された可能性がある。
2. リチャード (Richard, 1469-1550) 不詳。
3. キャサリン (Catherine) 1484年にハンティンドン伯ウィリアム・バーバートと結婚(2度目の妻として)。

(9)

バッキンガム公は、行幸中のリチャード三世一行とグロスターで別れてウェールズへ帰ったが、ここでブレックノック城 (Brecknock Castle) に拘禁されていたイーリー司教ジョン・モートンに会い、反リチャードの感情を吹きこまれて、反乱を使囃されたと考えられている。モートンは、のちに脱出し、イーリーを經由してフランドルへ逃れ、リッチモンド伯ヘンリー・チューダーを支援し、ヘンリー七世のもとでカンタベリー大司教(1486-1500)をつとめ、1487年には大法官となり、1493年には枢機卿に列せられ、1495年にはオクスード大学総長になる人物である。1461年のタウトンの戦いにはランカスター派として参加し、ヨーク派から私権を剥奪された。その後1470年までヘンリー六世王妃マーガレット・オヴ・アンジューと行動をともにし、ウォリック伯とクラレンス公の同盟に一役買い、1470年にウォリック伯にしたがってダートマ

スに上陸したが、1471年のチュークスベリーの戦いののちにはエドワード四世に服従し、私権剥奪が撤回された。1472年にセント・ポール大聖堂の受給聖職者、1473年に記録長官、1474年にはハンガリーへの使節、1475年にはピキニーの講和条約のための代表、1479年にイーリー司教となり、エドワード四世の遺言執行者のひとりであったが、1483年6月13日にロンドン塔で会合中にグロスター公によって陰謀と大逆罪を問われて逮捕され、まずロンドン塔に、ついでブレックノック城に拘禁されていたのである。

他方、1483年7月にはロンドンをはじめイングランド南部の各地で、ロンドン塔に幽閉されているエドワード五世とヨーク公リチャードを救出しようという運動が起こった。ロンドンにおける陰謀事件は、ロンドンで火災を起こし、その混乱に乗じてエドワード四世の遺児たちを救出しようとする計画であった。7月29日にリチャード三世は、この陰謀事件にかかわって逮捕された者たちを裁くための委員会の任命を命ずる書簡を尚書部長官に書いている。4人の首謀者たちは、ロンドン市司法官ロバート・ラス (Robert Russe)、ハウズローの贖宥取扱い人ウィリアム・デイヴィ (William Davy of Hounslow)、エドワード四世王室府馬飼育係ジョン・スミス (John Smith)、ロンドン塔納戸部係官スティーヴン・アイアランド (Stephen Ireland) であり、2人の王室役人が関与していた。彼らは4人とも処刑された。同時代のフランスの年代記作者トマ・バサン (Thomas Basin) は、この事件に言及しており、50人のロンドン市民がこの陰謀にかかわっていたが、ロンドン市は彼らに同調しなかったと述べている。

さらに重要なことは、これらの陰謀加担者たちの背後に、より有力な人物たちがいたことである。エドワード四世時代にスミスの上司であった王室府主馬頭ジョン・チェイニー (John Cheyne) がかかわっていたかもしれない。また処刑された首謀者たちは、ブルターニュに亡命中のリッチモンド伯ヘンリー・チューダーとペンブルック伯ジャスパー・チューダーに書簡を送ったことを告発されており、この関連でヘンリーの母マーガレット・ボーフォートが陰謀に積極的に関与していたのではないかと考えられる。このときにはエドワード四世の遺児たちは生存していると考えられていたので、ヘンリーの王位要求の可能性はなく、マーガレットの目的は、エドワード五世の復位とそれにとまなう息子ヘンリーの政界への復帰とリッチモンド伯領の回復であった。

リチャード三世が、行幸に出発したとき警戒していたのは、むしろウッドヴィル派の生き残りであるソールズベリー司教ライオネル・ウッドヴィルやリチャード・ウッドヴィル (エドワード四世王妃エリザベスの兄たち)、また1461年に処刑されたランカスター派のデヴォン伯トマス・コートニーの一族、さらにクラレンス公の元家臣たちの動きであった。しかし実際には反リチャード三世の動きは、すでにチューダー家と結びついていたのである。

おなじころに、エドワード四世の娘たちをウェストミンスター聖域から救出し、海外へ逃れさせる計画が発覚した。リチャード三世は、ジョン・ネスフィールド (John Nesfield) 指揮下の軍勢を修道院の周辺に配置して警戒した。また8月13日にリチャードは、マーガレット・

ボーフォートの異母弟であるジョン・ウェルズ (John Welles) を国王にたいする謀反人として所領を没収した。ウェルズは7月の陰謀事件にかかわっていたのか、さらに別の反リチャードの計画に関係したのかは不明である。28日にはロンドン、サリー州、サセックス州、ケント州、ミドルセックス州、オクスフォードシャー、バークシャー、エセックス州、ハーフォードシャーにおける反逆と重罪の審理裁判を指令する巡回裁判令書が発せられて、バッキンガム公が裁判長に任命された。リチャードはこれらの諸州における不穏な情勢をよく把握していたといえることができる。10月の反乱の中心となるのは、これらの諸州であるからである。反乱側の準備はすでにこの時期に進行しつつあったのである。反乱の指導者のひとりジャイルズ・ドーベニー (Giles Daubeney) は、8月20日に自分の荘園のふたつを妻との共同名義とする手続きをしているが、これはおそらく反乱が失敗した場合の没収を防ぐ措置であったと思われる。この段階においては、反乱の目的は、あくまでエドワード五世の復位であった。リチャードによるエドワード四世の遺児たちの殺害を主張する人びとは、リチャードが重大な反乱の可能性を予想したこの時期に、甥たちを殺害させ、それを世間の広めることによって、反乱の根拠を奪ってしまおうとしたと考えるのである。

このようななかで、ロンドン塔にいたエドワード四世の遺児たち、すなわち廃位されたエドワード五世とその弟ヨーク公リチャードは、1483年7月半ばには生存していたことを示唆する資料が存在するけれども、その後1483年8月ころには彼らの姿が見えなくなったとされる。彼らの死をめぐる確実な証拠を提供する同時代の資料はなく、彼らがりチャード三世の命令によってロンドン塔で殺害されたとする説は、当時のうわさとそれに基づく1485年以後のチューダー朝の反リチャード三世プロパガンダによるところがおおいことは否定できない。いずれにせよ、9月ころにはふたりは殺害されたといううわさが世間に広まっていた。殺害責任者としてバッキンガム公に言及している資料があり、さらにヘンリー七世を暗殺責任者とする説もあることは周知のとおりである。ただし、王太后エリザベス・ウッドヴィルは10月の反乱勃発のころには、ランカスター派の最後の代表者であるリッチモンド伯ヘンリー・チューダーが、エドワード四世の長女エリザベス・オヴ・ヨークと結婚することを条件に、彼の王位要求を支持していたと考えられており、このことは、エドワード四世の遺児たちはすでにそれ以前に殺害されていたとの推測の根拠とされている。もっとも、いかにリチャード三世がイングランドの聖俗諸貴族やロンドン市長・市参事会員たちのまえで王太后とその娘たちの保護を誓約したとしても、もし彼が数か月前にふたりの息子たちを殺害したことが知られていたならば、1484年3月1日に王太后が1年間にわたって滞在したウェストミンスター修道院の聖域から出て、リチャードの保護に身をゆだねることはきわめて理解しがたいことであろう。リチャード擁護論者の主張によれば、エドワード四世の遺児たちはすでに議会によって庶出と認定されていたのであり、リチャードは議会によって王位を提供されたのであるから、リチャードが彼らを殺害する必要はまったくなかったとされる。ヘンリー七世は、即位後すべての関連文書の焼却を命じ、同様に

庶出と認定されていたエリザベス・オヴ・ヨークとの結婚によってみずからの王位継承を正当化した。エドワード四世の遺児たちの殺害によって、よりおおくの利益を得たのはヘンリーであったとされる。

他方、たとえリチャード三世が殺害に責任があったとしても、エドワード二世、リチャード二世、ヘンリー六世の最期を見れば分かるとおりに、廃位された国王が殺害された例はイングランド史上少なくないことを忘れてはならない。問題は彼らが少年であったということである。1674年にロンドン塔のホワイト・タワーの階段下の地下で函に収められているのが発見され、現在はウェストミンスター寺院に埋葬されている遺骨は、骨格と年齢の解剖学的研究から見て、彼らのものである可能性はおおきいとされている。しかしこのことは彼らがりチャード三世の命令によって殺害されたことを証明するものではないことはいうまでもない。

さて1483年7月にブラックノック城（ブレコン城）に隠退したバッキンガム公は、ブルターニュ公国に亡命中のヘンリー・チューダーにエリザベス・オヴ・ヨークと結婚することを誓約させたうえで、ヘンリーを擁してリチャードを王位から追放しようという計画にかかわることになった。バッキンガム公はみずから王位を望んでいたともいわれ、事実、彼はエドワード三世の血統につながる大貴族であり、その王位継承権はヘンリー・チューダーのそれに匹敵するものであった。しかしこの陰謀の中心にいたのは、イーリー司教ジョン・モートンとヘンリーの母であるマーガレット・ボーフォートである。マーガレットは、前述のとおり、初代サマセット公ジョン・ボーフォートの娘にして女子相続人であり、1455年にリッチモンド伯エドマンド・チューダーと結婚し、この結婚によってヘンリーの母となった。しかし夫が1456年に死去したのちに、1464年ごろに初代バッキンガム公ハンフリー・スタフォードの息子ヘンリー・スタフォード（第2代バッキンガム公ヘンリー・スタフォードの叔父）と再婚したが、彼は1471年に死去し、1473年ごろにはスタンリー卿トマス（Thomas, Lord Stanley, 1435?-1504）と三度目の結婚をしていたので、この当時はスタンリー卿夫人であった。マーガレットはウェールズ人の侍医エドワード・ルイス（Edward Lewis）をウェストミンスター修道院の聖域にいる王太后エリザベス・ウッドヴィルのもとに派遣して、その同意を得ていたので、前述のとおり、この陰謀は当初から王太后やドーセット侯トマス・グレイをはじめとするウッドヴィル一族の支持をえていた。またマーガレットは、信頼する聖職者クリストファー・アーズウィック（Christopher Urswick, 1448-1522）をブルターニュのヘンリーのもとに派遣して計画の進展状況を知らせた。他方、イングランド南部のかなりおおくのジェントリーがこの陰謀に参加し、彼らは10月18日を期して決起することを定めた。

しかしリチャードはすでに10月11日にこの反乱計画を察知し、ノーフォーク公ジョン・ハワードにロンドンの防衛をゆだねてKent州の反乱軍に備えようと、ロンドンからリンカンを経由してレスターへ行き、そこで反乱鎮圧軍を召集し、15日にはバッキンガム公を反乱者とする布告を出した。バッキンガム公は、ウェールズとイングランド西部で兵を集めて、ブラックノッ

ク城から出撃して北東へ向かった。彼はウスターの南でセヴァーン川を渡るつもりであったが、10月15日ころにイングランド西部では大嵐のために河川が氾濫し、バッキンガム公の軍勢は、豪雨と洪水のために渡河することができず、ウェールズ人徴集兵たちは四散してしまった。バッキンガム公のウェールズにおける権威は絶大であったけれども、彼はウェールズの民族感情を把握していなかったのである。バッキンガム公の反乱と同時にイングランド南部の各地で、つまり東南部ではメイドストン、ロチェスター、グレイヴゼンドで、バークシャーのニューベリーで、ソールズベリーとエクセターで反乱が起こり、エクセターではエクセター司教ピーター・コートニー (Peter Courtenay, Bishop of Exeter) はヘンリー・チューダーの即位を宣言した。しかしこれらの反乱は、リチャードの先手を打った作戦によって相互の連絡を絶たれてしまった。リチャードは、みずから軍を率いてレスターから南下した。バッキンガム公はただひとりで山中に逃亡を余儀なくされ、ウェム (Wem) に住む家臣のレイフ・バナスター (Ralph Banaster) のもとに身を寄せたが、まもなく彼の裏切りによって11月1日にソールズベリーでリチャードに引き渡されたが、リチャードとの面会は許されず、翌朝処刑された。また11月にはイングランド南部の反乱はすべて鎮圧され、西部地方のヘンリー・チューダー支持者たちはコーンウォールから大陸へ逃亡した。このときヘンリー自身は、10月中旬におよそ5隻の船舶と325名の兵士でイングランド上陸をこころみたが、すでに時機を失したことを知ると、ノルマンディを經由してブルターニュへ引き返している。リチャード三世は、11月25日にロンドンへ帰還した。

翌1484年1月23日に議会が召集され、反乱の指導者98名にたいして私権剥奪法が適用された。彼らのおおくはイングランド南部のジェントリーであり、王室府の役人であるとともに、各州における地方統治の責任者たちであったので、リチャードは南部諸州との関係の改善を計らなければならなかった。バッキンガム公の反乱鎮圧後にヘンリー・チューダーの支持者のおおくが処刑されたが、反乱の中心人物マーガレット・ボーフォートは私権剥奪をまぬかれた。しかしその所領は没収されて、夫のスタンリー卿にあたえられた。この寛大な措置は、リチャードがスタンリー卿の忠誠を確保しようとしたためである。議会の閉会に先立って、リチャードは聖俗諸貴族に王太子エドワード・オヴ・ミドラム (Edward of Middleham) への忠誠宣誓をもとめたが、王子エドワードは1484年4月9日にミドラム城で他界し、リチャードはただひとりの正嫡男子を失った。リチャードの男系相続者としては第2代サフォーク公ジョン・ド・ラ・ポールの長男リンカン伯ジョン・ド・ラ・ポール (John de la Pole, Earl of Lincoln, 1464?-87) がおり、リチャードは彼を北部評議会議長に任命し、王位継承者としていたいと考えていたらしい。リンカン伯は、リチャード三世の姉エリザベスの子であり、叔父リチャードに最後まで忠誠を尽くすことになる。しかし彼が正式に王位継承候補者と認められたという確証はまったくない。

これより先の1483年のクリスマスに、ブルターニュに亡命中の反リチャード派は、リッチモンド伯ヘンリー・チューダーをイングランド国王に推戴し、王位継承を宣言した。同時にリッチモンド伯は、レンヌ大聖堂 (Rennes Cathedral) においてエリザベス・オヴ・ヨークとの結

婚を誓約した。反リチャード派の主要人物は、エクセター司教ピーター・コートニー、ドーセット侯トマス・グレイ、王太后の兄サー・エドワード・ウッドヴィル、バッキンガム公の反乱の首謀者のひとりであり、フランドルに亡命していたイーリー司教ジョン・モートンらであり、彼らはイングランド侵入に際してはブルターニュ公フランソワからさらに援助をうけることになったので、イングランドとブルターニュ公国との関係は悪化せざるをえなかった。リチャードとしては、当然ブルターニュ公国からの危険を除去しなければならず、翌1484年はじめにリチャードはブルターニュに使節を派遣し、ヘンリーの引き渡しを交渉した。当時ブルターニュ公は病床にあり、政治の実権を委譲されていた財務大臣ピエール・ランドワ (Pierre Ladois or Landais) は、当時の国際関係をも考慮してイングランドとの強固な同盟に気持ちが傾き、リチャードの要求に応じようとした。しかしイーリー司教ジョン・モートンがフランドルでこの取引を察知し、クリストファー・アーズウィックをつうじてヘンリーに警告したので、ヘンリーは1484年9月にブルターニュからフランスのアンジューへ入り、ジャスパー・チューダー以下の亡命者たちも彼の後につづいた。彼らは10月中旬にはフランス宮廷に迎え入れられていたのである。当時フランスでは、ルイ十一世は1483年8月に死去し、シャルル八世 (Charles VIII, 在1483-98) が13歳で即位していたが、幼少のため姉アンヌ・ド・ボージュール (Anne of Beaujeu) が摂政として実権を握っていた。父親ゆずりの鋭敏なリアリストとして知られるこの女性は、ヘンリー・チューダーを外交上の貴重な駒と考えて歓迎し、11月には3000リーブルの軍資金をヘンリーに提供した。ちなみにアンヌ・ド・ボージュールは、のちに1491年になって弟シャルル八世とアンヌ・ド・ブルターニュ (Anne of Brittany) の結婚を実現してヴァロワ王家とブルターニュ公家の統合を達成する女性である。

(10)

1484年夏になって、イングランド南西部、ロンドン、イングランド西部において情勢は不穏となり、陰謀事件や反乱計画が摘発された。

リチャード三世は、1484年7月6日にスクループ・オヴ・ボールドン卿ジョンを委員長とする委員会の設置を命じた。スクループ卿はイングランド南西部において国王の代理人の立場にあり、この委員会は最近大逆罪を告白したジェイムズ・ニューエナム (James Newenham) らのジェントリーを裁くためであった。ニューエナムは、1483年10月の反乱に参加したと思われる、1484年5月に赦免されていたが、今回彼が関与した反逆罪についての詳細は不明である。さらにリチャードは1484年7月中におなじくスクループ卿を委員長とするいっそう強力な委員会を任命したが、これはリチャード・エッジコム・オヴ・コティール (Richard Edgecombe of Cotehele)、絹物商人ジョン・レン・オヴ・ローンストン (John Lenne of Launceston)、絹物商人ジョン・ベルベリー・オヴ・リスカード (John Belbury of Liskeard)、染色業者ジョン・

トーザー・オヴ・エグジランド (John Toser of Exiland) らの反逆罪を調査するためであった。これら4名は共謀して、1483年10月の反乱に加担して亡命中のロバート・ウィロビー (Robert Willoughby) とエクセター司教ピーター・コートニーに資金を提供しようとしたのであった。首謀者は、ウィロビーの隣人のエッジコムであり、彼は1483年の反乱に参加して起訴されていたが、赦免されて私権剥奪はまぬかれていた。今回、彼は交易品の錫と羊毛で隠蔽してレンに現金をブルターニュへ運ばせる計画を立てていた。トーザーの役割とおそらくベルベリーの役割は、ブルターニュへ輸送される物資を提供することであったが、両名はのちに陰謀に関与した罪を赦免された。エッジコムとレンは反徒幫助の罪で起訴されたが、問題の金額は52ポンドをわずかに上回る程度であった。

7月10日には、ロンドンのポートソーケン区において、ウィリアム・コリングボーン (William Collingbourne) らが共謀して、トマス・イェイト (Thomas Yate) をブルターニュへ派遣し、ヘンリーがミカエル祭 (9月29日) 以前に、または聖ルカの祝日 (10月18日) にドーセット州のプールに上陸するように激励し、そうすれば彼の侵入にあわせて、コリングボーンと彼の盟友であり、イーリー司教ジョン・モートンの親族であるドーセット州のジョン・ターバーヴィル・オヴ・フライアメイン (John Turberville of Friarmayne) が、ヘンリーを支持して蜂起するつもりであると伝えたのである。またその8日後の7月18日には、コリングボーンは、リチャードとその側近たちを痛烈に風刺する扇動的な俗謡をつくって、セント・ポール大聖堂の扉に張りつけた。このように反リチャードの陰謀はロンドンでめぐらされ、宣伝もロンドンを舞台に行われたけれども、今回の陰謀事件の中心はやはりイングランド西部地方であった。コリングボーンは、ウィルトシャーの出身でエドワード四世の家臣であったが、1483年10月の反乱の結果、地方行政における地位をうしなっていた。ヘンリー・チューダーが彼らの提案にしたがったという兆候はなく、またコリングボーンの大逆罪を調査する巡回裁判令書が出されたのは、11月29日になってからであった。

1484年の秋になってもイングランドでは不穏な情勢がつづいた。9月29日に王室府侍従のトマス・グレイソン (Thomas Grayson) は、西部地方において反乱計画を探知された数人の人物の逮捕をリチャードから命じられた。詳細は不明であるが、グレイソンはもとプリマスの商人であったので、その地域における陰謀であったと推測される。10月4日には、ロバート・ホランド (Robert Holand) が数人の反逆者にたいする逮捕令状を受けとっている。

1484年7月から10月はじめに至るこれらの陰謀や反乱計画は、散発的であり、ひとつにまとまった反乱とはならなかったけれども、リチャードはイングランド国内におけるこれらの動きとヘンリー・チューダーの周囲にいる反リチャード勢力の連携を阻止するために全力を尽くし、1484年3月にはすでにアランデル伯の息子ジョンとスクループ卿がイギリス海峡監視の任務についている。またリチャードは反徒にたいして厳罰をもって臨み、たとえばコリングボーンは、以前の反徒たちが絞首刑に処されるだけであったのにたいし、絞首、去勢、腸抜きによって処

刑された。

10月末になって、ついにイングランド東南部とカレーにおいて反乱が勃発した。エセックス州において騒擾が発生し、コールチェスターではこの地のジェントリーであるサー・ウィリアム・ブランドン (Sir William Brandon) とそのふたりの息子トマスとウィリアムが率いる武装蜂起があり、彼らはイースト・マージー (East Mersea) で船を奪取してフランスのヘンリーのもとへ逃れた。リチャードは、この蜂起がきっかけとなってイースト・アングリアの他の地方でも混乱が生ずることを予想して、12月にハリッジ (Harwich) で反徒たちを阻止するように命じている。反乱はサリー州、ミドルセックス州、ハーフォードシャーに広がり、特にハーフォードシャーでは、レイフ・ベン・オヴ・オールダム (Ralph Penne of Aldeham) とロバート・クリフォード (Robert Clifford) が反乱の首謀者であったと思われる。前者はエドワード四世時代にかかわりのあったブランドン一族によっておそらく陰謀へ誘われたと考えられ、後者はサー・レイフ・ジョセリン (Sir Ralph Josselin) の未亡人との結婚によって、この地に所領があった。またこの反乱には、ジョン・スタージョンが執事をつとめるウェア (Ware) の王室領のヨーマンも参加している。ベンは領地を没収され、クリフォードは国王評議会への情報提供者となることを約束して、1485年4月に赦免された。ジョン・スタージョン自身は反乱にかかわらなかったが、王室領のヨーマンが反乱に参加した責任を問われ、1484年11月にエセックス州とハーフォードシャーの州長官の任期が終わると、12月にサー・ロバート・ブラッケンベリー (Sir Robert Brackenbury) がウェアの執事に任命されている。州長官としてのスタージョンの後任にはリチャード側近のサー・ロバート・パーシーが任命された。

1484年10月下旬には、カレーでも反乱が起こった。カレー近くのアムの城塞には、1473年の反乱に失敗したランカスター派のオクスフォード伯ジョン・ド・ヴィアが10年間にわたって拘禁されていたが、このオクスフォード伯を救出しようとする計画があるとの情報が10月下旬にリチャードのもとにもたらされた。リチャードは10月28日にカレー守備隊に属する国王侍従ウィリアム・ボルトン (William Bolton) にオクスフォード伯をひきとり、ロンドンへ護送するように命じ、11月はじめにドーヴァーで伯を引きとり、ロンドン塔へ護送するために、ロバート・ブラッケンベリーを派遣した。ところが、11月はじめにアムの守備隊長ジェイムズ・ブラント (James Blount) はオクスフォード伯を釈放し、カレーの物資輸送官ジョン・フォーテスキュー (John Fortescue) をともなってフランスのヘンリー・チューダーのもとへ逃れた。アム城の守備隊はブラントへの忠誠を変えなかったので、翌月カレーの司令官ディナム卿ジョン (John, Lord Dynham) に包囲された。オクスフォード伯は1485年1月に軍勢を率いてもどり、アム城の包囲を解き、アム城の守備隊をヘンリーの兵力に合流させた。

イングランド東南部における反乱とカレーの反乱はたがいに関係があった。カレーの物資輸送官ジョン・フォーテスキューは、ハーフォードシャーのパンズバン (Ponsbourne) の出身であり、その邸は反乱に巻き込まれた地域にあり、彼はおそらくその地の騒擾にかかわりがあ

ったであろうと考えられている。つぎにブランドン一族の存在がある。エセックス州の反乱は、起訴状によれば、ヘンリー・チューダーばかりでなくオクスフォード伯への支援を意図しており、トマス・ブランドンは1485年1月にオクスフォード伯にしたがってアム城へもどっているのである。しかしこれらのふたつの反乱を結びつける存在はオクスフォード伯自身である。ド・ヴィア家（オクスフォード伯）の所領のおおくはエセックス州にあるが、いまではノーフォーク公ジョン・ハワードがその大部分を領有していた。ブランドン一族は、ド・ヴィア家への忠誠心を呼び戻そうとしたのである。この地においてオクスフォード伯を支持する動きの指導者のひとりには、ド・ヴィア家のかつて所領、サフォーク州のラヴェナム（Lavenham）の管理官であったジョン・リズリー（John Risley）であった。また小物ではカースル・ヘディングム（Castle Hedingham）のジョン・スターリング（John Starling）とスタンステッド・マウントフィチュット（Stansted Mountfitchet）のトマス・テイラー（Thomas Tailleur）がいた。いずれもエセックス州のド・ヴィア家の所領である。オクスフォード伯がヘンリー・チューダーの名のもとにイングランドに侵入する計画であったかもしれない。そして背後で彼らを扇動していたのが、イーリー司教ジョン・モートンにほかならない。モートンはブランドン一族ともジョン・フォーテスキューともつながりがあったのである。

いうまでもなくカレーはイングランド侵攻にとってはもっとも有利な基地である。そのカレーにおける反乱にジェイムズ・ブランドンが関与していた事実によって、ヘイスティングズ卿がカレー守備隊司令官であった時代以来のカレーの他の高官たちがはたして忠実であるのかどうかという疑問を、リチャードは抱かざるをえなかった。またイースト・アングリアの反乱によって、新しいノーフォーク公ジョン・ハワードは、リチャードにたいする忠誠をこの地域で維持することができないということがあきらかになった。前述のとおり、モーブレイ家系のノーフォーク公位は、第4代ノーフォーク公ジョン・モーブレイの死（1476）と彼の娘アンの死（1481）によって断絶し、ハワード卿ジョンが1483年にノーフォーク公に叙されてハワード家系の初代ノーフォーク公となった。またノーフォーク公ジョン・ハワードはド・ヴィア家の所領のおおくを手中におさめていた。1484年10月末に起こった反乱であきらかになったことは、モーブレイ家の家臣であったブランドン一族がド・ヴィア家の利権をヘンリー・チューダーのために利用している事実であった。ハワード家がこのように孤立していたために、その家臣のなかにも反乱をもくろむ者があらわれるかもしれなかったのである。事実、コールチェスターの反徒のひとりには、ジョン・スクレイトン（John Scraton）であったが、彼の同名の父はハワード家の家臣であり、やはり反乱にかかわっていたのである。（1484年の反乱の記述は、ホロックス『リチャード三世』pp. 275-82による。）

リチャード三世は、1484年の春以来、リッチモンド伯ヘンリー・チューダーのイングランド侵攻を予期していた。これに備えてリチャードは、1485年にかけてノッティンガムを中心として各地に放射状に拡がる防衛組織をととのえて、嚴重な警戒を命じた。1484年12月7日には、

ヘンリー・チューダーとその一派を非難する『宣言書』を出した。そこでリチャードは、リッチモンド伯と呼ばれるヘンリー・チューダーの一味であるジャスパー・チューダー、ジョン・ド・ヴィア、サー・エドワード・ウッドヴィル、ピーター・コートニーを、私権を剥奪された反逆者と呼び、殺人者、姦通者、恐喝者として非難し、ヘンリーは父方においても母方においても私生児の血筋であり、それ故に王位を要求する資格はなく、彼は祖国を見捨ててイングランドの古来の敵であるフランス王に屈従し、フランスの支援を得るためにイングランドのあらゆる権利をフランス王に売り渡したのであると訴えた。これらの文句は1485年の夏にもふたたび使われることになる。1484年12月8日には軍隊召集の指令が発せられ、ついで12月18日には各州で任命された軍隊召集調査委員に回状が出され、軍隊の召集状況の調査が命じられた。

このようにヘンリー・チューダーのイングランド侵攻に備えるために軍事費が大幅に増大したが、イギリス海峡の防衛には最大の注意がはらわれた。このため当然ながら財源が不足し、財政はきわめてきびしい状況となった。そこでリチャードは、エドワード四世が商人たちから徴収していた強制献金（benevolence）の徴収にたよらざるをえなくなった。強制献金徴収委員会のもとに、数州ごとにふたり一組の強制献金徴収官が任命されたが、問題は、彼らはリチャードが信頼する家臣ではあったが、ヨーマンリーであり、各地の有力者であるジェントリーではなかったことである。たとえば、ヨークシャー、ノッティンガムシャー、ダービーシャーは、ステイーヴン・ハトフィールド（Stephen Hatfield of Skeffling in Holderness）とエドマンド・トールボット（Edmund Talbot of East Retford）の担当であり、ウスターシャー、ウォリックシャー、レスターシャーは、トマス・オター（Thomas Otter）とウォルター・グラント（Walter Grant）に委任された。オターは、ウォリックシャーのバークスウェル（Berkeswell）出身のもとネヴィル家の家臣であり、王室守衛官であった。グラントは、王妃私室付従者であり、バッキンガム公によって没収されたマクスストーク城（Maxstoke Castle）の管理官であった。

このように、貴族、ジェントリー、市民は、強制献金の徴収にたいしてばかりでなく、徴収官がヨーマンリーであったことにたいしておおきな不満を抱き、ついに1485年5月にいたって反乱が勃発した。この反乱はヘンリー・チューダーとの協力のもとに行われたものである。これにたいしてリチャードは、防衛の強化にあたるのと同時に、6月21日に尚書部長官に命じてヘンリーとその支持者たちをふたたび非難する『宣言書』を出させるとともに、翌22日には各州の軍隊召集調査委員に指示を出した。また同時に各州の州長官は、侵入の報告が入るとすぐに行動できるように任地に留まるように命令された。

(11)

リッチモンド伯ヘンリー・チューダーのイングランド上陸にたいする防衛態勢がととのえられていくなかで、リチャードは1484年4月にただひとりの嫡男エドワードをうしなっていたが、

それについて1485年3月には王妃アンが死去した。アン・ネヴィルは、ばら戦争の渦中でその運命を翻弄された女性のひとりである。リチャードが9歳から13歳までミドラム城で過ごし、サー・ロバート・パーシーやのちのラヴェル子爵フランシスというふたりの親友を得たころ、リチャードより4歳年少のアンも、母のウォリック伯夫人アン・ピーチャムや姉イザベルとともにミドラム城にいたので、このころにリチャードとアンはたがいによく知っていた。アンがまだ14歳であった1470年3月に、父ウォリック伯と義兄クラレンス公はエドワード四世を王座から追うべくウォリック城を出発したが、彼らは3月12日にスタンフォード (Stamford) 付近の戦いでエドワードに敗れた。アンにとっては不安に満ちた1か月ののちに、ネヴィル家の人びととクラレンス公夫妻はウォリック城から逃亡を余儀なくされ、エクセターから小さな船に乗ってカレーをめざしたが、カレーの近くで姉イザベルのお産がはじまった。ウォリック伯は、前述のとおり、ウェンロック卿からカレー上陸を拒否されたけれども、娘の陣痛を和らげるためのワインはなんとか入手することができた。ウォリック伯夫人とアンが必死に世話をしたけれども、イザベルの子は死産であったか、生後数時間で死亡したものと考えられる。ネヴィル家の人びとがノルマンディに落ち着いてまもなく、1470年6月22日にウォリック伯はルイ十一世およびマーガレット・オヴ・アンジューと会見し、その結果、当時14歳のアンはヘンリー六世の王子で当時16歳のエドワードと婚約することがとり決められ、この婚約はアンジューでおごそかに発表された。彼女は父ウォリック伯の宿敵であったマーガレット・オヴ・アンジューの息子と結婚することになったのである。アンはアンボワーズ城のマーガレットの家中に迎えられたが、彼らのアンにたいする態度は冷淡であった。いずれにせよ、アンは夫になるはずのエドワードにこのときにはじめて会っている。彼らの結婚式はおそらく12月13日に行われ、翌日若い夫妻はマーガレットとウォリック伯夫人とともにパリへ向かった。

それより以前の1470年9月13日にウォリック伯はイングランドに上陸し、10月6日にはヘンリー六世をロンドン塔から救出し、10月13日にヘンリーの復位宣言が行なわれた。アンが、マーガレットと夫エドワードとともに、いまや父ウォリック伯が支配するイングランドに上陸したのは、結婚の4か月後、1471年4月14日の復活祭日曜日のことであった。しかしその翌日アンが聞いたのは、バーネットの戦い(4月14日)における父と叔父モンタギュー侯の戦死の報であった。アンはマーガレットにとってもはや価値のない存在となったのであるが、しだいに増大するランカスター派の軍勢とともに移動した。5月4日の早朝、チェークスベリーにおいて戦闘開始のラッパが鳴り響くなかで、アンはマーガレットとその侍女たちとともに小舟に乗り込み、セヴァーン川の対岸の修道院に避難した。その日の午後になってランカスター軍の敗北の知らせがもたらされたが、アンはエドワード王子の消息をえることはできなかった。彼らがサー・ウィリアム・スタンリー (Sir William Stanley) によって発見されたのは3日または4日のちであり、アンはコヴェントリーへ連れていかれた。

アンは、バーネットの戦いの前にエドワード四世と和解していたクラレンス公に身柄を託され、

姉イザベルに預けられた。他方、このころグロスター公リチャードは、スコットランドとの戦いのために北方遠征の準備をすすめていた。彼は、遠征に先立って、ミドラム、シェリフ・ハットン、ペンリス (Penrith) などのウォリック伯の所領をあたえられ、さらに2週間後にはヨークシャーとカンバーランドにおけるウォリック伯の旧領のすべてをえることによって、少年時代の数年間を過ごしたミドラム城の支配者となったのである。リチャードはロンドンを出発する前に、アンとの結婚についてエドワード四世の許可を得ることができた。9月末にロンドンへ帰ったリチャードは、クラレンス公のロンドン邸宅にアンを探したが、アンは相続財産を獲得するつもりであったクラレンス公は、ネヴィル家の問題への干渉とみなしてアンは居場所を教えず、両者の確執がいつそう高まった。結局、リチャードは、アンがクラレンス公の従者の家中で料理女に身をやつしてかくまわれているのを発見した。リチャードは彼女をセント・マーティン・ル・グランド修道院の聖域へ案内し、彼自身は1471年のクリスマスを宮廷で過ごした。

リチャードとアンは、前述のとおり、1472年（または1474年）に教会の特免を待たずにウェストミンスター修道院において結婚した。彼らはウッドヴィル一族やクラレンス公から遠く離れたウェンズリーデイル (Wensleydale) の城にしばらく滞在したのちに、ミドラム城に落ち着いた。その後リチャードはミドラムとロンドンをしばしば往復しなければならなかったが、彼らは北部においてしだいに人心をあつめることになり、1473年（または1476年）には男子が誕生し、エドワードと名づけられた。このころのリチャードとアンにとってもっとも厄介な問題はやはり兄クラレンス公ジョージの野心であったといえよう。他方、リチャードは、アンは母ウォリック伯夫人を北部に迎えるために尽力している。ウォリック伯夫人は、マーガレット・オブ・アンジューとともにイングランドに上陸したが、夫の戦死を知るとビューリー修道院の聖域に入ったまま監禁状態におかれていたのである。

北部におけるリチャードとアンへの支持はしだいに高まり、リチャードはしばしばヨーク市を訪問し、レンダル (Lendal) のアウグスティヌス会修道院に滞在し、市長と市参事会員たちから温かく歓迎された。彼らはまたクリスマスと復活祭のページェントを楽しんだが、特に聖体祝日 (Corpus Christi) の祝祭に興味を抱いた。これは三位一体の主日 (Trinity Sunday) ののちの最初の木曜日にあたり、いつも晩春の好天に催され、ヨーク市のギルドが聖史劇 (mystery play) を上演することになっており、ホリー・トリニティ修道院 (Holy Trinity Priory) からヨーク大聖堂にいたる主要な場所で約50の場面が演ぜられるのであった。聖体祝日の翌日には、コーパス・クリスティ・ギルドの厳粛な儀式が挙行されるのであったが、リチャードとアンは1477年の祝祭のときに、このギルドの会員になった。リチャードの母セシリー・ネヴィルが入会してから21年後である。北部の支配者であるリチャード夫妻とヨーク市民のあいだには強い絆が形成された。

グロスター公リチャードは1483年7月6日にリチャード三世として即位し、アンは王妃とな

った。戴冠式でアンの裳裾をもったのは、1482年ころにスタンリー卿トマスと結婚していたリッチモンド伯夫人マーガレット・ボーフォートにほかならない。その後にリチャードの姉サフォーク公妃エリザベスがつづき、その後にノーフォーク公妃が20人の貴婦人の先頭をすすんだ。戴冠式後のリチャード三世の全国巡遊の旅に際しては、アンがヨーク市でリチャードとともに大歓迎をうけたことはいまでもなく、市長はアンに金貨100ポンドを贈呈した。

北部からの使者が王子エドワードの死を伝えたのは、1484年4月中旬のことであった。アンはこの悲しみからたちなおることができず、1484年のクリスマスにはすでに寿命が尽きつつあるように見えた。彼女の父ウォリック伯は疲れを知らぬ頑健な男であったが、その娘はふたりとも身体虚弱であり、姉イザベルもおそらく結核で24歳にならないうちに死亡していた。1485年2月になると、アンはついに寝込んでしまい、リチャードを絶望させた。リチャードは、ヨーク大司教トマス・ロザラムに、すでに息子が奪い去られ、いまアンが自分のもとから消え去ろうとしている苦悩とみずからの孤独を訴えた。アンは1485年3月16日に結核によってウェストミンスター宮殿で死亡し、遺体は荘厳な儀式によってウェストミンスター修道院へ運ばれ、セント・エドワード礼拝堂につうずる南側入口の近くに埋葬された。

(12)

リチャード三世がノッティンガムに到着してまもなく、スタンリー卿トマスがやってきて長らく不在にしている領地(チェシャー、ランカシャー、北ウェールズの東部)へしばらく帰って休養する許可を願いでた。もしそのあいだに侵攻があれば、自分の領地にいるほうがリチャードのために軍勢を召集するのがより容易であろう、とスタンリー卿はつけ加えた。スタンリー卿は、ヘイスティングズ卿の処刑以来リチャードに重用されており、つねにその側近にいた人物である。しかし彼は1482年ころにヘンリー・チューダーの母リッチモンド伯夫人マーガレット・ボーフォートと再婚していた。スタンリー卿は、このころ50歳くらいであったと考えられているが、軍人としても宮廷役人としてもゆたかな経験の持ち主であった。24歳ころに父スタンリー卿トマスを継いでスタンリー男爵となり、1460年以前にエレナー・ネヴィル(Eleanor Neville)と結婚した。エレナーは、ウォリック伯リチャード・ネヴィルやモンタギュー侯ジョンの妹であり、ヘイスティングズ卿ウィリアムと結婚したキャサリン・ネヴィルや、オクスフォード伯ジョンと結婚したマーガレット・ネヴィルの姉にあたる。ヘンリー六世が捕虜となったノーサンプトンの戦い(1460年7月)では国王側についていたが、その後エドワード四世に仕えた。しかし1470年にヘンリー六世が復位するとふたたびランカスター派に組したが、1471年にウォリック伯が戦死したのちには評議会議官、王室府長官としてエドワード四世に忠勤をつくした。1475年にはフランス遠征に参加し、特に1482年にはグロスター公リチャードの対スコットランド作戦において有能な指揮官であることをしめしていた。1483年6月13日にグロス

ター公リチャードがロンドン塔において4名の評議官たちと会議中に彼らを陰謀と大逆罪で非難して逮捕したとき、スタンリー卿だけはその場で釈放されたことは既述のとおりである。また1483年10月の反乱のときには、リチャード三世にしたがって、鎮圧にあたったけれども、スタンリー一族には反乱に関与している者が少なくなかった。さらにリチャードは、彼らがヘンリー・チューダーと気脈をつうじていることも承知しており、その忠誠心に疑いを抱いていたけれども、彼らの勢力はあまりにもおおきく、リチャードとしては、ヘンリー・チューダーの侵入に備えて、スタンリー卿トマスばかりでなく、弟のサー・ウィリアム・スタンリー (Sir William Stanley, d.1495) と息子のストレインジ卿ジョージ・スタンリー (George Stanley, Lord Strange) の支持を絶対に必要としていたのである。

リッチモンド伯ヘンリー・チューダーは、1485年4月から7月にかけてイングランド侵攻の準備をととのえ、リチャード三世の『宣言書』にたいする反論の手紙をイングランド国内の支持者たちに送り、自分にたいする強い支持に感謝するとともに、イングランドにおける指揮官たちと動員可能な兵力についてたずね、返答がありしだい侵攻を開始するつもりであることを知らせた。ヘンリーは、1485年8月1日にセヌ河口アルフルールから遠征軍を率いて出発し、ウェールズをめざした。遠征軍は、ブルターニュやフランスからヘンリーのもとに集まっていた数百人のイングランド人亡命者とフィリベール・ド・シャンデー (Philibert de Chandée) が率いる約2000のフランス兵から成り立っており、ヘンリーの叔父ペンブルック伯ジャスパー・チューダー、オクスフォード伯、イーリー司教、エクセター司教らが同行していた。一行は8月7日の日没直前に南ウェールズのセント・アンズ・ヘッド (St Anne's Head) を認め、ミルフォード・ヘイヴン (Milford Haven) 北側の最初の入江ミル・ベイ (Mill Bay) に上陸した。一部は南側の入江、現在のウェスト・アングル・ベイ (West Angle Bay) に上陸したかもしれない。ヘンリーはウェールズ出身であり、また南ウェールズはペンブルック伯の地盤であったので、この地のジェントリーにはヘンリーの支持者がおおかった。

ヘンリーは上陸後ただちに、リチャード三世のもとにいたまだ若い第4代シュローズベリー伯ジョージ・トールボット (George Talbot, 4th Earl of Talbot) の叔父サー・ギルバート・トールボット (Sir Gilbert Talbot) と、スタンリー一族にたいして使者をさしむけ、彼らの支援をもとめ、シュローズベリーでセヴァーン川を渡る計画をつたえた。サー・ギルバート・トールボットは500の兵を率いてヘンリーに合流した。スタンリー卿は、リチャード三世から出陣をもとめられたときには病気を口実にして応じなかったが、ヘンリーの要請にたいしてもたえず彼と連絡をとりながらも、なんの確約もあたえることができなかった。彼が宮廷から領地へ帰ったとき、リチャード三世のもとに息子が人質として残されていたためである。しかし西ウェール最大の豪族であるリース・アブ・トマス (Rhys ap Thomas) がヘンリーへの支持を表明したのにつづいて、ウェールズ各地でヘンリーへの支持者が増大した。ヘンリー軍は、8月15日ころにシュローズベリーを通過し、スタフォード、リチフィールドを経て、タムワースからレ

スターへ迫った。

ノッティンガムにいたリチャード三世は、8月11日にヘンリーの上陸の知らせをえたとき、ヘンリーの小規模な遠征軍はウェールズにおいてサー・ウォルター・ハーバート (Sir Walter Herbert) あるいはリース・アブ・トマスによって容易に阻止されうるであろうと予想していたと推測できる記録がある。つまりヘンリーの軍勢が、途中でおおきな妨害をうけずに、支持者をふやしつづつ8月15日にシュローズベリーへ入ったとき、リチャード三世は、一驚してノーサンバランド伯ヘンリー・パーシー、ノーフォーク公ジョン・ハワードとその子サリー伯トマス・ハワードらに国王軍への参加をもとめたとされる。しかしリチャードは周到に防衛計画を立ててきたのであるから、このような考えは受け入れがたいものである。おそらくリチャードは、ヘンリーの上陸を知るとただちに有力貴族たちに緊急の書簡を送って国王軍への参加をもとめたであろう。ノーフォーク公はこのときおそらくサフォーク州のフラムリングム城にいたが、8月14日までにリチャードからの要請をうけとっている。すなわちヘンリーの上陸の知らせは、ウェールズ西部からイースト・アングリアまでの約400マイルを7日で伝わったことになる。

リチャード三世は、ヘンリーがリチフィールドに到達したのを知ると、8月20日にノッティンガムを出発し、前日にレスターに集結していた国王軍に合流した。国王軍は翌21日に西進してボズワース・フィールドの近くのサトン・チーニー (Sutton Cheney) の付近に布陣した。国王軍の規模を正確に把握するのは不可能であるが、総勢8000ないし1万を数えたとされ、リチャード三世の軍2000ないし3000、ノーフォーク公軍1200、ノーサンバランド伯軍1200、スタンリー卿軍3000ないし5000の4軍団から構成されていた。これにたいしリッチモンド軍は約5000ないしそれをわずかに上回る軍勢を率いているに過ぎず、国王軍の半数に近かった。しかし一般的に、国王軍の規模は過大視され、リッチモンド軍は過小にみなされる傾向がある。

ボズワースの戦いそのものについても、当時の年代記作者の記述から正確な経過を構成することは不可能である。伝統的な説明によれば、国王軍は中央をリチャード、左翼をノーフォーク公、右翼をノーサンバランド伯がうけもち、北に向かって布陣した。これにたいしヘンリーのもとでオクスフォード伯が総指揮官をつとめるリッチモンド軍は西方から接近して、左翼を迂回させながら北から国王軍を攻撃した。したがって戦闘はまず国王軍の左翼をうけもつノーフォーク軍とリッチモンド軍の右翼をうけもつオクスフォード軍とのあいだで行われた。ノーサンバランド伯の国王軍右翼は、東北方に布陣しているスタンリー軍と対峙したまま交戦しなかった。最初の戦闘ののちに、両軍は撤退して体勢をたてなおしたが、このとき遠方にリッチモンド伯の姿を認めたりチャードは中央軍を率いてリッチモンド軍の本体へ突撃し、両軍のあいだで激戦が交わされた。ノーサンバランド伯の国王軍右翼はこのときも戦闘に参加しなかった。このとき北西方に布陣していたスタンリー卿の弟サー・ウィリアム・スタンリーの軍勢が南下して、リチャードが率いる国王軍の本体の側面を攻撃したために、国王軍は壊滅した。

しかしながら、チャールズ・ロスによれば、ボズワースの戦いの結果は、国王軍とリッチモンド軍が布陣したアンビアン・ヒル (Ambien Hill) の地形によって決定されたという。つまり、国王軍はアンビアン・ヒルの東側でノーフォーク軍を前衛として、リチャード軍、ノーサンバランド軍が縦隊をなしており、リッチモンド軍は西側でオクスフォード軍を前衛としてその背後にヘンリー軍という縦隊をなしていた。したがってリッチモンド軍の前衛オクスフォード軍と激戦を交わしたのは、国王軍の前衛ノーフォーク軍だけであり、後衛ノーサンバランド軍は戦闘に加わろうとしても、不可能であったとされる。

これにたいし、コリン・リッチモンド (Colin Richmond) は、1985年にボズワースの戦場について新説を提出した。彼によれば、最大の激戦が行われたのは、伝統的に戦場とされている場所よりも半マイル南方のダドリントン (Dadlington) とクラウン・ヒル (Crown Hill) により近い場所であるとされる。おそらくこれはリッチモンド伯が進軍してきた古来のローマ街道であるフェン・レイズ (Fenn Lanes) の道筋であるとされる。ロスが説くように、一部の軍勢がリチャードのために戦おうとしても戦うことが不可能であったというよりも、この新説によれば、彼らは裏切りとリッチモンド伯との内通によって戦おうとしなかったと解釈することが可能になるのである。リッチモンド伯の最後の勝利は、ノーサンバランド伯とスタンリー卿の裏切りに負うところがおおきい。

ボズワースの戦いは戦闘開始後およそ2時間で勝敗が決し、国王軍ではリチャード三世とノーフォーク公は戦死し、サー・リチャード・ラトクリフ (Sir Richard Ratcliffe)、サー・ロバート・ブラッケンベリー (Sir Robert Brackenbury)、ジョン・ケンダル (John Kendall)、サー・ロバート・パーシー (Sir Robert Percy)、フェラーズ・オヴ・チャートリー卿ウォルター・デヴァルー (Walter Devereux, Lord Ferrers of Chartley) とも戦場に倒れた。少数の者は戦場を脱出することができた。リンカン伯、ラヴェル子爵、サー・ハンフリー・スタフォード (Sir Humphrey Stafford)、トマス・スタフォード (Thomas Stafford) らである。なおウィリアム・ケイツビーは逃亡中に捕らえられ、絞首された。

リチャード三世はこのとき32歳と10か月であり、その治世は2年1か月28日であった。リチャードが敵に囲まれながら勇敢に戦うなかで戦死を遂げたことは、年代記者たちも認めることである。サー・ウィリアム・スタンリーまたはスタンリー卿トマスは、リチャードが戦闘開始前にかぶっていたが強打されて胄から落ちていた王冠をヒースの茂みのなかから発見し、リッチモンド伯の頭上におき、国王万歳とさげぶと、周囲に集まっていた兵士たちはそれに応じて歓呼の声をあげた。ノーサンバランド伯は、このあいだずっと、サトン・チーニーに留まっていたが、やがて呼ばれるとヘンリーのもとにおもむいてひざまずき、忠誠の意をあらわした。彼はおそらくみずから申しでて一時的に身柄を拘束されたけれども、その後熱心なヘンリー支持者となる。しかしリチャード三世からおおくの恩顧をうけながらリチャードに忠実ではなかったノーサンバランド伯は、北部の恥辱とみなされた。4年後の1489年4月28日に、彼がヘン

リー七世の命令によって直接税 (subsidy) を徴取するために、また北部の反乱をおさえこむために、ヨークシャーへ派遣されたとき、ジョン＝ア＝シャンプル (John-a-Chambre) とサー・ジョン・エグレモント (Sir John Egremont) に率いられヨーク市長自身をふくむ民衆がサースク (Thirsk) 近郊の狩猟小屋コックロッジ (Cocklodge) で彼に追いつくと、彼を馬から引きずりおろして、近くの櫛の樹で縛り首にしてしまった。これは、「北部の支配者」への裏切り者にたいする北部の人びとの報復であると考えられた。ボズワースの戦いののちにヨーク市がその代理人であるジョン・スプナー (John Sponer/Spooner) から「われわれを慈悲深く統治したもうた」リチャード三世の敗北を知ったのは、リチャードの敗戦の翌日であった。その後数週間、ヨーク市は騒然となり、ヘンリーを罵倒する声があったところで聞かれた。ヨーク市が派遣した80名の兵士たちはレスターまで到達したにすぎなかったけれども、この市の市長・市参事会員たちにとっては、リチャードの死は「この市にとっておおきな悲しみ」にほかならなかったのである。

1487年6月16日にニューアーク (Newark) 近郊のストーク (Stoke) における戦いで、リチャード三世の甥であり、後継者とされていたと考えられるリンカン伯が戦死した。この戦いがばら戦争の最後の戦いとみなされることがある。

参考文献

- Bennett, Michael, *The Battle of Bosworth*, Alan Sutton, 1985.
- Bennett, Michael S., *Richard III on Trial for Murder*, Complete Publications, 1994.
- Buck, Sir George, *The History of King Richard III*, ed. A.N.Kincaid, Alan Sutton, 1979.
- Chrimes, S. B., C. D. Ross & R. A. Griffiths (eds.), *Fifteenth Century England 1399-1509*, Alan Sutton, 1972, 1995.
- Chrimes, S. B., *Henry VII*, Eyre Methuen, 1972, 1977.
- Dockray, Keith (ed.), *Three Chronicles of Edward IV*, Alan Sutton, 1988.
- Dockray, Keith, *Richard III: A Source Book*, Sutton Publishing, 1997.
- Evans, H. T., *Wales and the Wars of the Roses*, Cambridge University Press, 1915; Alan Sutton, 1995.
- Fields, Bertram, *Royal Blood: Richard III and the Mystery of the Princes*, Regan Books, 1998.
- Gairdner, James (ed.), *Letters and Papers Illustrative of the Reigns of Richard III and Henry VII*, 2 vols., Longman, Green, 1863.
- Gairdner, James, *History of the Life and Reign of Richard the Third*, Cambridge University Press, 1898; Greenwood Press, 1969.
- Gillingham, John, *The Wars of the Roses*, Louisiana State University Press, 1981.
- Gillingham, John (ed.), *Richard III: A Medieval Kingship*, Collins & Brown, 1993.
- Goodman, Anthony, *The Wars of the Roses: Military Activity and English Society 1452-97*, Routledge & Kegan Paul, 1981.
- Griffiths, Ralph A., *The Reign of Henry VI*, University of California Press, 1981.

- Hammond, P.W. & Anne E. Sutton, *Richard III: The Road to Bosworth Field*, Constable, 1985.
- Harvey, Nancy Lenz, *Elizabeth of York: Tudor Queen*, Arthur Barker, 1973.
- Hicks, Michael, *Richard III: The Man behind the Myth*, Collins & Brown, 1991, 1992.
- Horrox, Rosemary, *Richard III, A Study of Service*, Cambridge University Press, 1989.
- Jenkins, Elizabeth, *The Princes in the Tower*, Hamish Hamilton, 1978.
- Johnson, P. A., *Duke Richard of York 1411-1460*, Clarendon Press, 1988, 1991.
- Kendall, Paul Murray, *Richard the Third*, 1955, 1983.
- Lander, J. R., *The Wars of the Roses*, Alan Sutton, 1990.
- McFarlane, K. B., *The Nobility of Later Medieval England*, Clarendon Press, 1973.
- Mancini, Dominic (trans. with an Introduction by C. A. J. Armstrong, *The Usurpation of Richard III*, Alan Sutton, 1989.
- Mitchell, Dorothy, *Richard III and York*, Silver Boar, 1983, 1997.
- Mitchell, Dorothy, *Richard III and the Wars of the Roses*, Quacks, Undated.
- Mitchell, Dorothy, *Guide to Ricardian Yorkshire*, Silver Boar, Undated.
- Newman, Sarah, *Yorkists & Tudors 1450-1603*, Blackwell, 1989.
- Pollard, A. J., *The Wars of the Roses*, Macmillan, 1988.
- Pollard, A. J., *Richard III and the Princes in the Tower*, St. Martin's Press, 1991.
- Potter, Jeremy, *Good King Richard?*, Constable, 1983.
- Rees, David, *The Son of Prophecy: Henry Tudor's Road to Bosworth*, Black Raven Press, 1985; John Jones, 1997.
- Ross, Charles, *The Wars of the Roses: A Concise History*, Thames and Hudson, 1976.
- Ross, Charles, *Richard III*, University of California Press, 1981.
- Ross, Charles, *Edward IV*, Methuen, 1974, 1983.
- St. Aubyn, Giles, *The Year of Three Kings 1483*, Atheneum, 1983.
- Seward, Desmond, *Richard III: England's Black Legend*, Franklin Watts, 1984; Penguin, 1997.
- Seward, Desmond, *The Wars of the Roses*, Constable, 1995.
- Storey, R. L., *The End of the House of Lancaster*, Sutton Publishing, 1966, 1999.
- Sutton, Anne F. & P.W. Hammond (eds.), *The Coronation of Richard III: The Extant Documents*, Alan Sutton, 1983.
- Sutton, Anne F. & Livia Visser-Fucks, *The Hours of Richard III*, Alan Sutton, 1990.
- Weightman, Christine, *Margaret of York: Duchess of Burgundy 1446-1503*, Alan Sutton, 1989.
- Weir, Alison, *Britain's Royal Families*, Pimlico, 1989, 1996.
- Weir, Alison, *The Princes in the Tower*, Pimlico, 1992.
- Weir, Alison, *Lancaster and York: The Wars of the Roses*, Jonathan Cape, 1995.
- Williamson, Audrey, *The Mystery of the Princes*, Academy Chicago Publishers, 1992.
- 尾野比左夫『リチャード三世研究』溪水社, 1999.
- 城戸 毅 「バラ戦争」『十字軍と騎士』(世界の戦史4)人物往来社, 1966.